
夜明けの月、サークルの空

吉岡 遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜明けの月、サークルの空

【Nコード】

N0673E

【作者名】

吉岡 遥

【あらすじ】

少年と少女が織りなす、切なくておかしくてどこか懐かしいSF青春ラブストーリー。

1 - 1 サクラミステリー

——パチパチパチ——。

一定で規則的なリズム。

それはプラスチックをはじくような音。

不自然とも滑稽ともいえる鳴りものの正体は、部屋の窓から響く。
しかし——。

そんな不可解な音が部屋の住人である青井 あおい 優介 ゆうすけ にとっては好都合であつたのだ。なぜなら、さして寝心地がいいといえない机の上で、首から先を変な角度にもたげて突つ伏していたのだから。つまりは、怠惰で陰鬱な睡眠をむさぼっていたわけで、いちはやく解放されるにこしたことはないということであつた。

「はうつわ?!」

ようやく目を覚ました優介は意味不明な奇声を発して直立不動を
してしまい、それによつて散見された机の上は物で溢れていた。

例えば、夏休みの宿題らしき資料がざくばらんに置いてあつたり、プリントが散乱していたり、文庫本や辞書なんかが積み重なつていたり……。そして端っこに置いてあつたノートには幼児が書くような奇怪な線が記してあつたし、まるでミミズが張つたような字は睡魔に負けまいとして懸命にこらえていた証なのだろうと推測できた。

さらには、父がたびたび無断で置いていく理論書や哲学書など、

そういった類の本も見受けられていた。まあ、それに手を付けた後はないのだが。

要するにそこは、一人の人物がよくそこで覆いかぶさって寝られるもんだと言えてしまうカオスな状況であつたのだ。

と、そんな机にしばらく手をつけていた優介だったが、凝り固まつた体をほぐすように伸びをする。その拍子に、サイドにあつた消しゴムがころころと滑り落ちていく。

ああ、空耳だろうか……。おはよう、と優しい声だ。そして、早く目を覚ませ、と罵声に近い声も。なんだか交互に聞こえてくる。よく聞き知つたソプラノの声が。

すると今度は首をブランブランとして、寝ボケまなこの状態から意識を覚醒させようとする優介。今の状況を飲み込んだのか、いくらか落ち着いた調子でつぶやいた。

「彩穂のやつだな？　こんな時間に……」

まず時計を見て、夜の九時過ぎであることを確認。それから窓の方へと向かう。ついでに勢いよく白い布地のカーテンを開ける。するとそこには……、優介にとってのお隣さんであり幼馴染でもある

美少女——小手川^{こてがわ} 彩穂^{あやは}が、いまかいまかと待ちわびていた。

いや、待ちわびていた？

こんな幼馴染チックな表現は適當ではない。もしかしたら獲物をとらえるような視線——とでもいったほうがいいだろうか。

そのやたらと印象に残る大きな瞳、ちょこんとした鼻、アヒルっぽい口、艶やかでメディアムな黒髪、つまりは小手川 彩穂という人物が人を引き付ける魅力に溢れていたのだ。だからこそ、二階から射撃の構えを見せるスナイパーの仕草であっても、宵の満月に照らされた姿はさまになっていた。

「ああ、やっぱり……」

そういった優介は真正面を見据える。
でもな、彩穂。

宿題ならまだ終わってないぜ。夏休みも後五日で終わりだから、
どうせあれだろう。貸しなさいとでもくるのだろう……。はつき
りいって成績は雲泥の差なのにな。

それともあれか？

マンガ本か小説か、あるいは量子重力論、空想論理学の本を貸し
なさい、とでもくるのだろうか――。

優介は、彼女の「今すぐここを開ける。さもないと――」的な強
い視線を感じつつ、目をこすりながらも窓を全開にした。

「なに？」

一番簡潔な疑問文。しかし、優介の予想に反した答えが返ってく
る。

「こらあ――、優介！　なんて寝ぼけた顔なのっ！」

「えっ……」

「いいつ?!」

「あの……」

「いいから聞きなさい!!」

「だから……」

「いいからっ!!」

「はい！」

「優介ーいいつ、今から一時間後の十時にわたしの家の前に集合だからね」

「んなつ?!」

「いい? ありつ————たけの誠意でこのわたしに付き合いなさいっ！」

いつの間にか、手にしていたモデル銃は後ろに放り投げていた。

手を腰に当てて人指し指で人を指さすポーズ。あるいは自由の女神を真似ているようなポーズ。なんにせよ絶対的な自信と堂々とした貫録を表わしているそのポーズ。

そして、ペラペラと優介が付き合わなければいけない理由を列挙する彩穂。これを聞いている相手は、まったくもって二の句が継がないでいるのだが、そんなことはお構いなし。

「ねっ、とつても大事な用事な・の・っ! 一分たりとも遅れたら許さないんだからっ！」

すると今度は、窓のサッシの部分に肘を当てて可愛くポーズを決め込む。その頬杖について見つめてくるしぐさは天真爛漫な笑顔。なのに優介にとっては、小悪魔な微笑みの部類に入るんだろう。

「あのさ、だからなにを——」

「バーン」

ふいに、彩穂の指先から空砲の雷光が放たれる。今までの散弾がらたった一発の凶弾。確実にしとめられる至近距離で撃ちのめす意思のある砲弾。ただ、これは撃たれた方が自由自在に対応ができる弾であった。

ああ、また始まったか。優介はいとまもなく考える。

受けて立ってやるよ。ここは生きろべき死ぬべきなのか……。ハムレットはあの時どうした？　ここは躊躇することなく判断しなくてはならないよな。素早く、そして正しいほうにだ。答えはいつだって二者択一だ。どちらかを選ぶべきなんだ。

優介が凝り固まっている間、彩穂はしびれきらしたようで、「そうねっ、どんなに生きてくても生きることができないという設定よっ！」と、上から目線でのたまった。

そうか、死んでしまうほうだったか。危うく超人的な技で生き残るほうを選択しそうになっていた、と胸をなでおろす。

「さあ、どうするのー」

彩穂は相変わらずに高みの見物模様。この後、どう展開するのかを眺めているのだ。そして撃ち放ったばかりのピストル指を、所在なさげにくるくると回していたのも変わりはない。

「ほらー、この世にはこびる——そうねえ……、現実にはどうしようもできない不条理に直面して……。とても、とても悔しいんだけど。このじくじたる思いなんて捨て去って、そう死ぬ間際の最後！　その最後に、かけがえのない何かを伝えなければならぬとか……。こんな設定でどうだっ！」

彩穂は元気良く言い放った――のだが、このように突然始まったやりとりをみれば、いったい何をしているのだろうかと誰しもが思うかもしれない。だけど、彩穂は昔からよくこんなごっこ遊びをよくする女の子であって、それがいまでも続いていたのだ。

そしてこの遊びは、彼女の斜め上をいく発想、または琴線に触れるような切り返しできたならば合格、意にそぐわない展開や強引な超展開ならば不合格。

もちろん彩穂の裁量によって全てが判断されることは言うまでもない。

これは長年幼馴染として過ごしてきた優介であっても、なかなかフィーリングを合わせるのは大変だった。

「――それで、今日の場合のテーマはなんだ？」

アドリブでの言い返しが思いつかなかった優介はぼそつと聞いてみる。彼は彩穂のごっこ遊びを少々とつつきにくさを感じながらも、結局はそれなりに楽しんでいた。

「うーんとっ……」

「あー？」

「そうだっ！」

何か閃いたのか、彩穂の眉がぴくつと動いた後、「そのさっきの状況で、あえて笑いをとりなさあいっ！」なんて言った。

「まあ、待て。俺は起きぬけなんだから、とりあえず五分のレイトを要求する」

そう言つと優介は、一目散にトイレへと駆け込んでいった。

小手川 彩穂は今か今かと待ちわびていた。

五分も遅らせたんだから、すごいことをしてくれるはずだよね。

さて、優介は何をしてくれるのかな。どんな切り返しをみせてくれるのかな、と。

ハッキリ言つて今日のテーマは難しい。だって、シリアスな展開の最中に無秩序に放り込まれたギャグなんだから。こんなの水に油を注ぐとか、トムソーヤの物語でつまらなそうにペンキを塗るぐらいの違和感。もう浮きまくったシュールな場面しか想像できない。でも、それが楽しみなんだけどね。

「あつ……」

ここで、ようやく優介が姿を見せた。それもずいぶんと猛々しい顔つきである。

しかし彩穂をちらつと一瞥すると、その表情が一瞬だけ柔らいだ。だがまた気合を入れるようにピーンと張りつめた表情になったのだ。

さあ、舞台は整った。少年よ、対死を見せる！

彩穂にも優介にも緊張感がほと走る。

二人にとってきつと今は、砂埃が舞つて、乾いた風が吹いて、馬のひずめの蹄鉄の音がパツパツカと鳴つて、それらがぱたりと止まる。そんなカウボーイのワンシーンを連想しているのだろう。この距離感、そしてこの緊張感で――。

「バーン、バーン」

カウボーイハットを抑えるしぐさをしながら、彩穂が咄嗟に身を翻してピストルを撃ち放った。今度は二発だ。頭と心臓。確実に命を断ってきた。

すると発砲が起こなわれてすぐ、大仰なふるまいで胸を抑えてしやがみ込む優介。

しかし——いつからいるのだろうか。たけやさおだけなんていいそんな近所のおじさんが、楽しそうにそれを見つめている。

「この世に、生を、授かった、とき、から、我は、思っ、て、いた……。——ぼく、どさえも~~~~~ん」

「うわっ！」と、悲鳴に近い声を挙げる彩穂。

「ど、どうだ?!」

ネコ型ロボットの声真似はいいとして——。てんでシナリオ無視の一発勝負。超展開の力技なんて、と思う。

「さあいて——いつ!」

口を開けばこんな言い方。無理な設定を作り出したのは自分なのにね——。

「ならば!」

すかさず気合いの入った声が響く。どうやら優介はひるまなかったようだ。そして第二弾を用意していたみたいで、もう一発撃ってこいよ、と挑発した視線を投げかけている。やはり彩穂は人指し銃

口を向け、呼吸を整えて

「バーン」と。

本日四発目。またもや人指し指の先から強烈な轟音とともに鋭い雷光が放たれた。

にこつと笑った彩穂の——おそらくこれが最後であろう狙い場所は股間?!

「うわっああああ——!!」

断末魔の叫びに近い声。苦しんでいるのか悶えているのかすらわからない。

「おっ、おれは……」

二、三十秒もの時間をめいっばい使った後、優介がおもむろに口を開く。

あの撃たれてのたうちまわっていた姿勢から、体を少し起こしてノーガード戦法のような虚ろいだ状態でふらふらと……。すると突然、自分の頬をめいっばいにつぶしはじめたのだ。

「ファ、ファ、ファンタジーの——せかいに、たび、だち、だか、っだあ……。ああ、しゅよ……」

声は裏声。表情はムンクの叫びそのもの。

「しゅよ~~~~~~~~。ここに腫瘍できちゃったあ」

ムンクの表情をしながらも、撃たれたであろうところをぎこちな

い動作で——両足の大腿部をすりすりする形で股間付近をもぞもぞとさする。

これを見た彩穂は、渾身の作品であろうムンクのことなんかとうに忘れてしまい、ちらりと一瞥しただけでくねくねした動きにソッポをむいてしまった。

「セ、セリフが長いからダメなんだからねっ」

彩穂は辛辣に切り捨てたのだが、顔がほころんでしまうのを必死に堪えて窓を閉めていた。そして、自分から超展開を作りだしてしまったと自省する。

「あーいてえ——よ！」

なんだか、優介の部屋から、あいてえーなんてありえない種類の言葉のたぐいが聞こえる。これから会うのに……なんて思う彩穂。

「そつ、そんなこと言ったって、ダメなんだから……」と、笑いかみ殺しながら、ポツリ呟くのであった。

1 - 1 サクラミステリー (後書き)

はい、ここまで読んでくださった方ありがとうございます。

でも、それなんて演劇部？と思われましたよね、きつと。

たぶんこれから先もキャラクター重視のライトな小説になりそうですし、それ明らかにありえないなんてことも書くかもしれません。漫画みたいな感覚で、ですね。

ただ最終的にはセカイ系的な雰囲気にしていかないと、とは思っています。それにファンタジーと銘打ちましたがサイエンスファンタジーだと思います。

これから変更する可能性はありますが。

そして後は、この小説の誤字、脱字、語句の使い方がおかしければ知らせてくださいと助かります。感想のほうもをお待ちしていますので、どうか一言お願いしますね。

一九九九年、ノストラダムスの偉大なる終末大宣言。

そして二〇一五年、小手川 彩穂の暴虐なる週末大宣言。

この二つの事柄に明確な違いがあるとすれば、齡十五歳、青井 優介にとってどのような影響力をもたらしているかどうか……。ただそれだけのことだとしたら、後者の方が恐ろしいものである。

今度は何を企んでいるんだ？ こんな時間に。しかも機嫌を損ねてしまったし……。

優介は先ほどの演技に夢中になりすぎて、大仰な振る舞いで倒れたのがいけなかったと思っていた。それは、その時に転がっていた消しゴムが背中突きささったのもあるけど、さすがにあの演技はやりすぎたのではないかと考えていたからだ。

「はあ……」

そしてあの時痛みを与えてくれた先のとんがった消しゴムを、ポーンと机の上に放り投げる。しかし乱雑した机の上は、それを受け入れことなくコロコロと跳ね返ってしまった。

「あー、もうあれだな……。先の尖がった消しゴムは一生買っことねえな……」とぼやく優介。

今はもう軽くなった痛みを抱えながらも、よっこいしょと立ち上がる。

すると今度は、さきほどまで慣れない動きをしていた大腿部がピキピキと……。そう、大腿部が攣るといふ暴拳に出はじめたのだ。

「ここここむらがえし！！　こむらがえしがあ——！！」
と叫びつつ、ベットのの上に飛びのつてのたうちまわっていた。

しばらくして痛みが治まった優介は、床に転がっていた消しゴムを机の上に置く。

すると、残りが五日に迫った夏休みの宿題が視界に入って意気消沈してしまい、ようやくあげたはずの重い腰をまたどっかりと下ろしてしまった。

そこで彩穂が急に言い出した大宣言、それは前回いつだったかと考えはじめ、二週間ほど前の出来事だったことを思い出したのだ。

「トランポリン衝動の所為！　それが急に見たくなつたの！」

これはその時に彩穂が言い出したことだった。

なんでも人とマットの反発力、調整力、空中動作におけるコーディネート力が見たかつたらしく、優介はデンマーク体操（リズムカールで連続的な動きが世界各国に大きな影響を及ぼしたらしい）みたいな、柔軟性、強靱性、巧緻性が鍛えられる動作を頻繁にやらされていた。しかもその前に、トランポリンの上でジャンプすることがいかにも楽しいんだってことをえんえんと語られ、全くやる気なかった優介がもう無性にトランポリンの魅力に取りつかれてしまったのだった。

夏休み、学校寄つて、トランポリン、男女二人で、夢中になつて。これは……??? 今から考えると物凄く怪しいよな。

けれども、だ。やっぱり彩穂のやつは準備がいいというか、なんというか。

きつとあの時は、学校内の全てを網羅しているスパーキーを使ったのだろう。体育倉庫室に忍び込んで——というかこんなことぐらひは大したことないか——。

じゃあ……? それならば今回は? 彩穂の企んでいることは? さっぱり見当がつかないながらも、優介は彩穂の思惑を考えてみた。

まさか、またトランポリンだろうか。でもさすがに、暗がりではそれはないか——。

「つたく……あゝやゝほゝのぶあゝかあゝ」

ふるふると稼働していた扇風機のところまで行つて声を震わせた。すると予想通りに、部屋いっぱいこもつたようなビブラートの音が響き渡る。

——あれっ? なんか妙に懐かしいなこの感覚。

優介は、なんの脈絡もなしに思い立つた単語をポンポンと並べていく。それは、身近な人の名前から始めて、モノの名前、アメンボ赤いなあいうえお的な言葉遊戯、この地方の昔言葉など見境なく続けていた。

きつと心に引つ掛かる何かを思い起こそうと喚起させていたのだ

ろう。もう童心に返ったかのごとく、扇風機の前で声を送っていた。

「あゝあゝわれわれは——?!」

この時だった。もう何分も声を出し続けていた優介だったが、ここで何かに気がついたらしく途中でセリフを止めたのだ。

——そうか。この感覚だ。昔、まだ子供の時だったか？

——この街でミステリーサークル騒ぎがあつて、何度も何度もこつやつて宇宙人の声真似をしたんだっけ。今みたいに音を振動させて、我々は宇宙人デス、と。もちろん宇宙人の声なんて知らない。だけど、脳内にはその声がデフォルトと化していて、何の疑いもなく信じ込んでいた。それで、この話を彩穂のやつにすると、彼女は目をきらきらと輝かせていたんだ。

そうなるともう、宇宙人が絶対言いそうもないセリフや、扇風機が宇宙人と交信するための機械、どうして地球人なんかと交信するのかといった背景を一緒に考えて遊んでた。こうやってよく遊んでいた。

そうだったよ。あの時はなあ……、存在しないものについて考えること。ファンタジーとかSFとか……。そんなことを考えるのが楽しくて楽しかった。空想は無限大で、繰り広げていた世界も壮大だった。

優介は考え深げに思い返す。

あれから八年だ。今は現実つてものを認識してきたのかもしれない。非現実つてものは現実生活で補えない脳内の保管であつて、ある一種の——そう、現実逃避の類だつてことを——。だから今の

世の中、宇宙人とか未来人、超能力者、異世界人など、そんな悠長なことは言ってられないのかもしれない。それよりも人のほうに目を向けなければいけないのか……。

と、このように優介が考えていたことは現状でも現実問題として挙げられていた。

なぜなら、今置かれている世界が戦々恐々としていたからである。針の上で逆立ちをしているぐらいの奇跡の星——地球。そこに天文学的確率ともいえる有機生命体の存在。それでさえ存在していることが稀有でありながらも、やがて地球は人類によって汚染されていった。

その発端はなんてことないものだったりする。

中国で自転車をこいでいた人々がいつせいに自動車に乗り換えた、熱帯地方のインドの企業や家庭が一気にクーラーを導入して電力を使うことになった、などなど。

それは人が生活の利便性を追求した結果であって、別段問題はなかったはずだった。

しかし、そのおかげで各国のパワーバランスが崩れ、過度なエネルギーの放逐がさかんにおこなわれ、そうして起こったのは国それぞれのいがみ合い、交渉の断裂、やがて自国を閉ざすように閉鎖。自由貿易は影を潜め、海外旅行すらままならない状態になっていった。

しかも今更、環境問題だ、人類が傲慢にも進化だと思い込んでいたがそれは退化だ、技術革新だと考えていたのも戦争のための破壊工作だ、あるいは思弁の果てに生み出された神という絶対的な存在は、民族や宗教など様々なものが錯綜する今の現実を生み出したんだ、と。

そんな論調がさかんに叫ばれ始めていた。

そしてここ北日本でも、いつ起こるか分からない南日本とのビツクバン。

エネルギー自給率が四パーセント足らずだった南日本が、近年に

なつて新エネルギーを発見したのだ。これも大きくパワーバランスに変化をもたらしていた。

あー、とてもダウナーな気分だ。この蒸し暑さのようなはつきりしない世界。からつと透き通るような暑さではなく、じわじわと忍び込んでくるような暑さ。一服の清涼剤みたいな存在が現われてくれればいいんだ。それも全てを超越する存在。例えば、彩穂みたいな強引なやり方でもよいのかもしれない。平和が保障されるのならば……って考えすぎか。

だけどな……、彩穂に関して言えば昔からずっと変わらないんだよな。プラス思考で、いつも何か面白いことはないかと考えていて、鬱屈とした気持ちに新しい風を吹き込んでくれる。まあ、限度をはるかに超えて迷惑に感じることも多々あるんだが――。

優介は扇風機の風を顔いっぱいに受けながらも、ぼんやりと思考を巡らせていた。

「おにーちゃん。なんか、おせんたくする物なあーい？」

どうやらいつのまにかうとうとしていたようだ。

洗濯機がくるくると回転している音。それと優介の妹である青井優希の声がした。

しかし、くぐもった声でよく聞き取れない。

「えっ？　優希――？　今さあー、洗濯つて言った？」

「えー。あー。今、優希のことおー洗濯板つて言ったでしょー？」

「い、いや、そんなこと言ってないって！」

「あつそー。ならいいけど。でおにーちゃん？ おせんたくはっ？」

「え、あ、特にはないから」

「あつそー」

「あつ！ 優希ー。そういえばさ、さっきカゴに入れたカーゴのズボン、洗濯機にもう突っ込んだ？」

優介は聞いておいてすぐに、この問いはないと自省する。何のために洗濯をしているんやら。そこにズボンがあつたら不自然じゃないか、と。

「あつたりまえでしょー！ おつせんたくなんだからあー！」

予想通りにかしましい声が返ってきた。優介はあのぷにぷにした優希のほっぺが軽くぷくうーと膨らんでいるだろうと考える。

「そつだよな……」

「ねえー、なんかまずかったのー？ おにーちゃんってばー」

「いい加減やめろって。そのアクセントの呼びかたは……。こつちが恥ずかしくなる」

何度言ったらわかるんだ優希のやつ。でも、相手にしたらきりがない。

「で、どうしたの？ どっかに出かけるのー？」

階段を駆け上がってき登ってきた優希が、部屋に入ってきた。

「あー、もう少ししたら出かけてくるからー」

「ええええええ〜！ それって、あやねえーとデート？」

「違うな」

「ほんと？」

「うん」

「ホントに？」

「あー」

「本当なのかな、かな？」

「本当だって……」

「だったらーっ、優希の目を見て、優希の話を聞いてー」

優希が真剣な表情で、そしてすぐ近くまで近づいてきて言った。

「少しは心の洗濯したほーがいいねー、おにーちゃんはー」

「あっそー」

優希のからかい半分の声を聞きながらも、辺りにジーンズがない

か見回していた優介。しかし履きかけのジーンズは見当たらない。
しょうがない。新しいのでも履くか。

しかし、だな……。このズボンをはき換えるという行為、これ今日で何回目だろうか。

指折って数えはじめる優介。その数は片手だけには治まらない。

そして、自分は一日に七回もズボンをはき換えるのかと、桐タンスの軽い引き出しを開けながらも苦笑していた。

はい、ここまで読んでくださった方貴重な時間を割いてくださりありがとうございます。

ですが——とうとう強引にもSF的な世界感を出してしまいました。そして作者は、ここで見切られてしまいそうで心配なのです。

しかも最後は、もうライト小説定番の——狙いすぎの感もある妹キヤラで中和を図ろうとしたあさはかさ……。

こんな堅苦しいところが苦手だという方、斜め読みで結構でございます。

それとスイーツな恋愛小説を期待されていた方申し訳ありません。

てかいませんよね、大丈夫ですよね……。

というよりは、あらずじでネタばれ感があるのに前に進まない物語のほうが問題かもしれませんね。

では、引き続き感想のほうをお待ちしています。作者の糧になるのでどうか一言お願いしますね。

あの時の空も満月がのぼっていたのだから、たぶんそうだといえるのだろう。

青井優介にとっては、幼馴染でありお隣さんでもある小手川彩穂。彼女は今日のテンションと同じように、なんの前触れもなくモデルガンでビービー弾をパラパラと撃ちつけていた。そして、おそらく自分が思い描いたとおりであろう——そんな高らかな大宣言をする。

その姿は今回とまったく同じであって、もちろんその後は彼女特有のささいな戯言。お堅いあいさつで、炎暑の砌みきりがどうたらこうたらとか、相手の反応を見る愉快犯のような気持ちで楽しんでいたし、しまいにはフランス人っぽい告白シチュエーション、といった、なんとも返しの難しそうなごっこ遊びを付けくわえるのも変わらない。まるで、日常のありきたりな会話だけでは物足りず、刺激の強いスパイスを利かせるような感覚であるのだが……。その姿はいつも通りであった。

しかしながら、である。あの時、大宣言までして彼女がしたかったことは、ほんの些細なことだといっても過言ではない。

一応、面白そうで何かの考察になるという名目は付いていた。けれどもその内容とは、夜風に当たりながら屋根の上で横になると、草むらの上で横になるのではどっちのほうが心地よいかというのを実際に比べてみたい、という至極簡単なことだったのだ。しかも、なぜか妹の優希までも呼び寄せて、川の字のように一緒に寝ころんで、それで日常の他愛もないことを普通にするだけ。その時

の彩穂といえば、わざと緩い会話で楽しんでいたようだった。ただ、さりげなく優介が、結論はどうだったのかと聞いて、「そんなことはどうでもいいのよ！」なんて一喝されていたのはご愛敬なのだが、とまあこういうふうには、彩穂には自分の中で会話のギャップを作り出していき、その落差も含めて楽しんでいる節もあるのだ。まったくもって気まぐれであり巧妙。しかも一か月前と二週間前とはやることも全然違う。それに彩穂の場合は、優介が望んでいないときにやってくる。

やはり自由人小手川 彩穂のスタンスは奥が深く分かりにくい。いつも突飛な発想で、無理難題で、行き過ぎて荒唐無形なところも感じられ、あまのじゃくであって――。

それでも、彼女の根底にはいつも楽しいが含まれているのは間違いないことだった。あるいはもしかしたら、それ意外になにか深い意味を含ませているのかもしれないのか……。

「遅れることなく来てよきかな、よきかな――」

五分前行動がモットーになった優介には、彩穂から遅刻すると概念は存在しない。これも彩穂に振り回され続けた故に習得した行動パターンであって、もし仮に遅れたのなら開掌の手刀が飛んでくる。だからこの時も、指定時間よりは少し早めにやってきていた。

そして、ただぼんやりと佐倉地区に古くから伝わる切妻造りの住宅、豊穣な実りをもたらす小麦畑の森、満月と無数の星が奏でる八月十五日の空なんかを繰り返し眺めていたのだ。

「俺が遅れるわけ――んっ?!」

「だーれだっ？」

咄嗟に覆いかぶさった手のひらが、やけに冷んやりしているのに驚く優介。

「うわー目が、目があ……冷てえ」

「氷で冷やしてきたのー」

「やー、どうしてっ！」

「えっ、驚かせようと思ってー」

彩穂がさも当然だとばかりに言い放つ。

「だが、強く押しつけすぎだー」

「えっ、もしかして、こつちのことー？」

小首を傾げながらも、自分の胸の部分に人指し指を持っていく彩穂。その拍子に優介の視界に光が入る。ちなみに、彩穂は小さくもなければ大きくもない年相応の標準サイズのバスト。だが体のラインが映えるクリーム色のＴシャツ。それが見事に体のラインを際立たせていた。今は立秋を過ぎて幾分か涼しくなる残暑の季節——夜間であっても夏真っ盛りなのに変わりはないのだから、通気性に特化した薄着な服装は当然だといえてしまう。

「ねえ……」

「うっ」とうなってしまった優介は、瞬時に思考を張り巡らせてし

まう。

今の、いまのめくるめく体験を覚えてもいないのか……。そもそも押しつけられたのか？——ていうか、彩穂の手が押し付けすぎたと言ったつもり。だけど！押しつけてきたのか……？——いやいや……、決してそんなことはないはずだ。考えてみるとかすりもしなかった？たぶん。ああ、たぶん知らない。そもそも狂喜まではいかないけど、驚喜はするはずだ。っておい、プーっつてつぶしてみるな。わざとらしく……。

ただ、何が目的なんだろうか、なんて詮無いことを考えるのは既に止めていた。そもそも彩穂の行動に意味も求めること自体がナンセンスであるからだ。ここは華麗にスルーをするに限る。——のだが、理性というものは肝心な時にはいつも正常に働かない。

「このおーへんたいっ！」

からかい口調とは正反対な真顔でこう言った後、にっこりと笑う彩穂。きつとおちよくっているのだろう。これもまたいつものことだ。それに悪い気はさらさらしない。そう気を持ちなおす優介。

そこで、だ。彩穂に聞くのは野暮なことだとは考えるのだが、やはり疑問に思ってしまうのが道理。自分たちはこれからどこへ行くのかを尋ねてみた。

しかし、そんな思惑なんて届かない。彩穂はにんまりと叫んで、「それは、着いてからのおったのしみ——っ！——」なんて言うのだ。

「さてと……」

急にくるりと回れ右をして軽くウインクをする彩穂。これまで優介は気がつかなかったのだが、その後ろ姿には大きなナツプザッ

クが見受けられた。

「あ、彩穂、それは？」

「ああ、これ？　これはね、お・く・の・て」

そう言った彩穂は優介の手首をむんずと掴みにかかる。さらりとしたその手は、脅威の引力を生み出し冒険の始まりを告げていたのだ。

優介は、手が冷たい人はホントに心が優しい人、こんな文句が思い浮かんで慌てて打ち消していた。めっそもないことだ。彩穂は優しいとは違う。まあ面白いのだ。少なくとも自分にはそうだろう？　彩穂……。

「さあー、行くからね、優介！」

いったいどこへ行くのかは教えてくれない。どうせ離す気もさらさらないのだろう。

「時は一刻を争う！　これからの有事に備えて万全の下準備を整えるべしっ！」

それが出発の号令であって、時は十時きっかりを刻んでいた。

「おいっ、あやほっ?!」

彩穂は手首をがっちりロックさせて、勢いよく前へと進みだす。もう、優介がつんのめってしまうほどに。

やはり彩穂は好き勝手なんだよ。そう再確認してしまう。だけど、このことは今までに何度となく繰り返されてきて、やってきたこと。

いまさら反芻することでもないかな。

「ほらー、はやくしなさいっ！」

ここで彩穂がもう一度強く手を引く。きりりとした精悍な表情。だけど、その表情はすぐに緩んでしまった。それは優介も、とてつもなくテンポの悪い早足のスピードに合わせようと、懸命に歩を進めていたのだから。

はい、ここまで読んでくださった方貴重な時間を割いてくださりありがとうございます。

やっと物語が動きはじめたんですけど……今回も本文が少し硬いですかね……。

で突然あれなんですが、このありがたくも場所を提供してくださっている「小説家になろう」さんの後書き、あまり書いている人が少ないですよ。

僭越ながら、勝手ながらの義務感で（ここまで目を通している人がいらっしやるのかも分からないんですが）後書きの充実を図ろうかなんて考えていたりもしまして……。

ちなみにセカイ系作品は書くにあたって参考にする作品あるんですよ。それはもちろんあの新世紀が付くあれです。それ以降で似た系統の作品は「ポストエヴァ」なんて呼ばれていますので……。

ただたぶんなんですが、この小説はそんな展開にはならないと思います（おそらく）

しかし根底には常にあの世界観があるんですよ。

では、引き続き感想のほうをお待ちしています。作者の糧になります。

すのでづか一言お願いしますね。

程なくして、まばらに住宅が集まっていた場所も抜け出した優介と彩穂。ここまでは十分とわからない道のり。つまり、少し歩けば小麦畑の森にたどり着くのだ。そして利用者の減少で廃止となった路線も通り越し、小麦畑の隙間を縫うようなあぜ道、緩やかな斜面のけもの道、土ぼこりの多い石段なども通過する。二人にとってはそれなりに慣れ親しんだ道である。

それにしても……と優介は思う。物事を遂行させようとする時の彩穂の推進力は凄まじい。まるで道がさくさくと動いてしまうようだ、と。

ようやく二人は、もう一度同じようなあぜ道、さっきよりも数の多い石段を登った後、市内一面が見渡せる小高い丘にたどり着いた。

「やつぱりここか……」

もう途中からは、どこへ向かっているかを勘付いていた優介。

そこは佐倉地区で随一の絶景スポットで、『サクラナイト』と呼ばれる場所だったのだ。由来は文字通り、佐倉の夜景が見渡せるからである。

ただ近年ではサクラナイトを遥かに凌ぐ知名度で『サクラミステリー』と呼ばれている。もちろんこれもそのままの意味で、佐倉にできたミステリーサークル。

そしてこのサクラミステリーはなかなかのいわくつきで、形を成している部分から少し離れたところ一帯にぐるりと堀が囲んであ

ただ。だから迂闊に侵入することができないだろう。

しかし昼間であれば入場することもできる。幾何学に基づいて作られた優美な線をなぞってみたり、刈り取られた作物の断片が物理法則ではありえない方向に変化しているのを眺めたりがすることは可能であった。それに都合がつけば、基地からの空遊もできるらしい。するとそうすれば、上から見たミステリーサークルの景色が一段と乙なのか、これを目当てにした申し込みには長蛇の列ができてしまう噂があった。

ただ、そのような佐倉地区随所の観光名所が、一転して立ち入り禁止の区域の場所になってしまうのだ。夜間は――。

と、その話になれば、今から八年前に、突如として現われたミステリーサークルが一世を風靡したところから遡らなくてはならない。当時は空前絶後の大騒ぎであって、北日本だけではなく事実上他国扱いと化していた南日本にまで広がるぐらいであった。つまり、本当に世間を揺るがす重大ニュースだったのだ。

だから、この場所でのミステリーサークルという存在意義はとてつもなく大きくて、主にイギリスを中心に世界中に散らばっていたミステリーサークル（人為的に作られたとされていて、これらのミステリーサークルは二十世紀のジョークだとされている）とは、少しばかり趣が違う。

それも研究調査機関の成果によって、確実に人為的ではない自然現象ではありえない茎の倒しかた、なにか神の見えざる手が働いているのではないか、あるいは未知のエネルギーが存在している、と。そんな政府の公式見解も発表されていたのだから。

ただ、そのことに対する反響も凄まじかったのは言うまでもなく、例えばある科学者は、それを竜巻やプラズマといったものだと思じて疑わなかったし、物理学者はその幾何学な形がいかにしてできたのかを必死に解明しようとしていた。

しかしだんだんと、それは真綿に水がじわじわと浸透していくように、当時は宇宙人の襲来が関係しているのではないかという噂が

世間に広がっていった。そしてミステリーサークル関係の情報は変に一人歩きし、パルプルテパルプルテというお告げを聞いたなんて人の言葉が流行る始末。

やがてその影響もあつてか、この宇宙人襲来説で佐倉地区の存在が一躍有名になっていった。また、それを前面に押し出しての街おこしも計画されたりもした。

でもその矢先であつた。さかん行われた報道に規制が敷かれはじめパタリと消える。すると今度は、それに伴って周囲の警備が増えていき、厳戒態勢という言葉で括るのが一般的になっていたのだ。ということでは民衆の過熱を抑えるためだろうという論拠を経て、今に至るのである。

ちなみにサクラミステリーの謎にはもう一つおまけがあつて、その近くにただ一本だけ植えてあつた古株の桜の大樹が、サクラミステリーが誕生して以来八年間も花を咲かせていないという話がついてくる。

「で、ここにきてさー、なにをするんだ？」

優介が不安そうな声で聞き返すが、その声を無条件でさえぎる彩穂。

「いっいつ。優介っ。これからわたし、大事なこと言うんだから、よく聞きなさいっ」

パーソナルなテリトリースペースよりもほんの少しだけ優介に近づく。そして、自分との空間にほんのわずかな距離を開ける彩穂。後ろで両手を組んでほんのつま先立ち。しているかしていないかぐ

らしいの微妙な背伸びだ。

それに対して、なんだかむずがゆいような感覚がして視線をそらす優介であったが、彩穂は構うそぶりも見せない。

「それは一昨日の事なの」

急にトーンを落としてポツリとつぶやく彩穂。そんなに最近のことかと、優介は心の中で毒づいてしまう。なぜなら、もっと重要なことで長い間内に秘めていた想いでもぶつけてくるのかと考えていた。

むろんそのようなことを言うと、気まぐれな逆鱗に触れかねないので内緒ではある。

「じつはね、サク兄の部屋から、大事そうに切り取られたスクラップを見つけたの。お盆の日だね……」

「——サク兄さんか……」

サク兄。彩穂の口からさらっと出たのだが、実の兄貴である小手川サクのことだ。それは彩穂にとって、あるいは優介にとっても少しばかり辛い過去。だって、彼は二年前の夏のお盆の日、その日を境にいなくなったのだから。

——俺はある真理の探究をする。だから、やらなければいけないことができた。

そう言い残して家を出て行ったサク兄は、忽然と姿を消してしまつたのだ。

そして彩穂はその時、もうこれ以上涙は流せないんじゃないかつて程泣いていた。悲しみの慟哭に暮れるその姿は声をかけられないほどで、彩穂にとってそれぐらいにシヨックな出来事であつた。

実際に、幼いときに他界した父、あの頃は特に仕事で忙しかつた母、まだ幼かつた妹の未萌^{みなも}を残してまでの兄の判断は、到底受けいられないものなのかもしれない。

さらに大学の四年生だつたサク兄は、ジャーナリズム関係の就職が内定していたので、全て投げ打ってしまったことになるのだから。そして彩穂はというと、感情に任せるまま嘆いた時期を過ぎ、吹っ切れたようにいつもと変わらない彩穂になっていた。

変わってしまったことといえば、盲目的なまでにサク兄は帰つてくると信じていたことだけであろう。いつか自分達の所に帰つてくると――。

「あのね、疑っているかもしれないけど、とても信憑性にあふれる情報なんだから」

「疑つてはいない」

サク兄という単語が耳に入り、彼がまだいたところで、よく遊んでいた幼かつたころの思い出がふわぁーとよみがえってくる。

紙飛行機、スケッチブック、広辞苑、バイオリンだつた。そのときのマストアイテムは。

「ねっ、だから優介っ、聞きたいでしょ！」

彩穂の瞳がきらきらと輝きだした。でも、とりあえずは無表情で

様子を窺う優介。それはとても心配だったから。今回はいつもよりも三割増ぐらいで、厄介なことなりそうだと確信を持っていたのだから。

はい、ここまで読んでくださった方、内容的に読みにくい部分でありながら本当にありがとうございます。

これ、恋愛小説じゃあーないですね。設定詰めすぎですね。膨らましすぎですね。

伏線回収できるのかなあー?! そろそろ新キャラ出したい?! (つておい)

もちろんここが一番キツイところです……はい、申し訳ないです。でも、もしかしたらSFに切り替えたほうがいいのか悩んでいますね。

いやそれよりも次辺りで、世界観の説明よりも演劇的な活動をしてもらわないと。

とまあ、それはともかくとしまして、作品の名前を近々変更する予定ですのでご了承ください。

なぜなら構想を練っていた時からずっと考えていたんですが、どうもしっくりこなくて……。

結局、ファンタジー調な題名をなんとなくつけてしまいました。だから変更する予定です。

そして変更するには、愛とか恋とかが入れたほうがいいのかもしれませんが。そうしたら読者が増えるのかもしれませんが（笑）もっとインパクトのある名前を、と。

もちろんその前には、この場にて連絡は致しますので。

それと改行を大幅に増やしました。特に携帯の方は読みにくかったと思います。

とまあこんなんですが、どうか見捨てないでくださいませ。引き続き感想もおまちしています。

「んゝ。ちょっとおゝ。なあーに？ そのしけたつらはっ！ 聞いてみたいとかとは思わないわけ？ わ・た・し・は、優介に耳の穴かつぽじてまでして聞いてほしいのにつ！」
と、彩穂がむすっーとした表情して言い放つ。

だが優介は思う。きっと困難なことだろうから考え直してはくれないだろうか、と。

しかしそうは思うものの、今までの経験を鑑みるといたずらに時を費やすだけ。そもそも、既にここまで連れてこられている。下手に反対しても、きつと無駄足に終わってしまうだろう。それは彩穂の性格を考えれば周知の事実なのだから。

「そつ、そんなこと……は——」

「なんで！」

「何でって言ったって……」

「だからどうして——」

「——と、とにかくさあ——」

「うんっ」

「話だけは——」

「もお——っ！」

「——って、おいっ？！——」

そう叫んだ彩穂は優介の口元を両手で抑えようとして、草の生えていない小さなくぼみで足を滑らす。すると、意図せずに抱きつくような形になってしまう。

「うわっ……」

静かな場所にはさつと草の音が響く。

それは、映画ならばきつとスローモーションな転び方。優介はその重みを受けながら草枕で、彩穂は隣で腕枕。その姿は、少女が頭を打たないよう懸命に守っている少年だった。

「き、きれい……だな」

寝ころんでいた二人の視界からは、どこまでも続いていると錯覚してしまいそうな広がりある空間。こぼれそうなほどの満点の星が広がっている。

「じゃあ……、あたしは……きれい？」

「えっ？」

「あたしは？」

「まあ……な」

「口裂け女の真似」

「えっ？」

優介は思わず怪訝そうな顔をしてしまい、彩穂がそれを見て満足げにうなづく。

「あのさ……」

「いや——な——か——な——い」

「——えっ……？！」

彩穂が何を言っているか……それが聞こえない。ふるふると動いている口の振動だけを見送る優介。

「なんて……言った？」

「いや……、なんだかこれ、なつかしい……、なあーって」

彩穂は、大事なものをかかえているように己を抱きしめていた。いつものあのツンツンと、自由奔放と飛び跳ねているような口調ではない。優しく穏やかで、軽やかで癒されるような声だ。

しかし優介には、さして心当たりはなかった。こんな抱きかかえるような体勢で、それに見あげれば満点の星空。記憶の片隅にも残っていないかった。

いや、あるいはそれとも——。

「そつ、それは——……どういう意味？」

あいまいに問いかけたせいもあってか、そのままの姿勢でお互いに見つめあう。長い長い沈黙がやってきた。彩穂の不敵ともいえる微

笑みが心臓を波打ち立たせている。

「ドッ、なんかドッキドキするね〜」

その後に発せられた第一声。それはからかうような声だった。体の力がひゅうと抜けていく。あー勘違いだったかと――。

すると素早く立ち上がり、四肢を折りたたんだような縮こまった格好になっていた彩穂に、手を差し伸べる。

「ほっ、ほら早く立ったほうがいいぞ！」

「あー、ありがと……」

いつになくしおらしく、ちょこんと座って見上げた彩穂の上目使い。それが変に気になる優介。

「――たく、無駄にドキドキと――」

「はあー？」

「ん？」

「なんでもない」

「だからなん……」

「あー。もう、ホントはそこまでするつもりはなかったのよー！優介がいつまでたってもわたしの話を聞かないからでしょっ！」

さっきまでのしおらしい態度が急変して、ささつと優介の手をつ

かみ起き上がる。

そして洋服にまんべんなくついていた草の残りかすをパンパンと払う。草粒がはらはらと落ちていく。満月の光がそっぽを向いた彩穂の横顔を映し出す。それを見た優介はなぜか耳たぶを抑えながら、また薬指の先にちくちくとした違和感を感じながらも、今はきつと三つとも全部赤いだろうなと思う。

「それよりも、続きよー！ ミステリーサークルについてのある噂の調査を、夏休みの宿題にするのよっ！ だから聞きなさいっ！」

その口調はさながら、先ほど起こった出来事をすべてなかったことにしてしまおうという意図が感じられた。

「だから、なあ…… もっと建設的なプランを——」

「なによ！」

「ていうか、また俺のを写すんだろうがー。彩穂のほうが断トツに頭がいくせに」

優介はもつともらしきことを言いかけた。

しかしまるで聞く耳を持たなくなった彩穂が、その可愛らしく突き出したアヒルみたいな口で切り返す。

「優介にはロマンがないのよー！」

そう断言した。それもきっぱりと。

しかも、優介にとってはまだ何をするかを提示されていないのだから、何がロマンだかもわからずにである。

「それにこんなことをできるのは幸せなのよ、きつと！」

こう言い切って優介を黙らせる。怖いほどの満面の笑みも浮かべる。

ただ優介は、内容はわからないながらもおそらくあれだろう、とだいたいの察しはついていた。

——のだが、渋い顔をして曖昧な態度を取っている優介を見て、彩穂はさらに目をつり上げていた。あの柳の葉のように細くきれいな美人さんの眉が——もう見事までの柳眉の逆立ちと形容されるくらいに。

だからこそ彩穂は、「いい加減聞きなさいっ！」と脅迫めいた口調になっていた。

しかも、聞いてくれないといまからここで暴れてやるぞ、といった雰囲気醸し出すのだ。

「ああ、分かったよ。分かったって！」

ついに従ってしまったか、と優介は頂垂れる。

「よおーしっ」

「どんな話だ？」

すると彩穂は少し落ち着いたようで、途端にはにかんだような笑顔を浮かべた。

よくもここまでころころと表情がかわるもの、と優介は思っているが、そんなことは露しらずで堰を切ったように語り始めたのだ。

はい、わざわざ貴重な時間を割いてここまで読んでくださった方がありがとうございます。

本を買うときは必ずあとがきからチェックする作者、吉岡です。

内容のほうはとりあえずSF路線は突破しました。

ほっと胸をなでおろしている所存です。——なんて思っていたいのですが、展開は相変わらず遅々として進みません。

もうこれは癪みたいになっているのでしよう。ゆっくりとした展開であっても、どうかこのペースに付き合ってくださいませ。お願いします。

そこで……今日お話したいことはあれです。前々回の話の続きで、セカイ系作品『ポストエヴァ』のお話をしましたよね?! 実はなんと、そのような作品がこの『小説家になろう』さんの中にあるじゃないですか!

と、それを取り上げたいのです。

そんなことをしても大丈夫ですよね。

ホントに勝手なんです、その作品名は『霹靂のレーヴァテイン』と言います。

この小説は素晴らしい世界観と語彙の豊富さ。しかも面白いですよ！
では、引き続きながら感想を欲していますので、どうか一言お願いしますね。

「——あのねっ優介、決まり切ったことを言うけど、ここは有名なサクラミステリーでしょ。でも満月の真夏の夜。正確には八月十五日の今日なんだけどね」

勢いよく話しながらも、彩穂の顔がどんどんとほころんでいく。

「時計の針が十一時十一分を指し占めすその一分間の間だけ、十五歳の男の子と女の子がミステリーサークルの真ん中で手をつなぐ、輪を作る。そしてその場所で、十一文字ぴったしに収めた願い事を……そう、相手に聞こえないよう口にする。すると七十五日後の十一時十一分には、どちらか片方の願いごとがなんでも叶うの」

「あー……、ス、スクラップの話なのか？ それ……」

「……うん。だからね、これから私たちがそれをやるのよ！」

どうやら彩穂は、好奇心と、探究心と、それと小さな幻想に大きな希望を抱いて、夜間のミステリーサークルを訪れたようであった。

「それでね、その無駄に高い優介の運動能力を利用して、壁を……ほら、ロクククライミングの要領でよじ登ってほしいのよ！」

こう言った彩穂は、もちろん優介の運動能力を高く評価していた。というよりも優介には、『疾走の騎士^{ナイト}パンサー』という誉れ高き通り名があつて、校内ナンバーワンの運動神経の持ち主なのだ。ただ、優介はそれほど上背に恵まれたとはいえないし線も細かつ

た。けれどもしつかりとした体幹は持ち、バランスの良さを保ち、鍛練の賜物であろう鍛え上げられた筋肉はそれ相応の場所で隆起していた。

だからこそ、その能力を披露して欲しいの、如何なく発揮してほしいの、私のために役立てて欲しいの、と彩穂は真摯に言葉を重ねていたのである。

結局のところ、そびえたつサクラミステリーの外側の壁から侵入してもらい、中の錠を開けてもらおうという魂胆であったといえるのかもしれないが。

しかし、彩穂の長い話を全て聞き終えた優介。その反応とやはら、見事なまでにあんぐりと口を開けている状態だった。彩穂がこれ以上ないくらい嬉しそうな表情で、「うん、やっぱり面白そうだわ!」なんて、一人合点がいったように呟いているのも視野にいれながらも――。

「――なあ、それって……マジかよ……?」

「あたり前でしょっ」

「――俺にできるの……かよ?」

「もっちろんっ」

「でも、それは……」

彩穂は諭すように言う。

「いいっ、優介!。大事なのは一步を踏み出すことなのよ」

「――あのさ、明らかに……」

「だ・か・らあー、前に進むことは人間の精神で最も重要なことなのよー！　まさにそれが物事を成し遂げる時の真髄！」

「はあ……」

「あのねっ優介。かのコロンブスだって行動を起こしたからこそ成功したのよ。例え目的とは違うにしろ、アメリカ大陸にたどり着いたという成功。つまりね、どんなに困難であっても、謎に対して果敢に挑むことはとても大切なことなのよっ！」

優介はブンブン、ブンブンと手を降った。いくらなんでもそれは言いすぎだと、それはまずいと考える。

実際に、夜間にミステリーサークルへの侵入を試みた凡例はないものの――そもそも、そういう凡例がないこと自体がおかしいのだが――全く報告されていないのだ。

優介はサクラミステリーを遠目で見やりながら思い返す。

あの八年前、周囲の警備が増えていき、厳戒態勢という言葉で括るのが一般的になったあの時から……。自分たち見たいに侵入を試みた人はいなかったのだろうか……。と。

ただ最近では緊張状態の続く南日本との関係により、警察という組織までもが前線の基地警備の増員に補強されていた。だから民間人が雇われた人ではないかとまことしやかに囁かれていた。これは手薄にはなっているといってもよい。

とりあえずは彩穂の腹の底の真意を探ろうと、優介はじっと見つめる。

「ああー、ううー」

「ん？」

「なっ、なんか勘違いしてない？ その目つき！ わたしはねっ……別にわたしは優介と一緒にサークルの真ん中で……、そう、童話みたいなメルヘン的な事をやりたいわけじゃないんだからねっ！」

どの口が、さっきはロマンが足りないと言ったのだろうか。その言葉を聞いた瞬間、思わず頭を抱えそうになる優介。すると彩穂は一呼吸を置いて、顔をぐーんと近付けてこう言った。

「夜、入ってはいけない所に忍び込むのが面白そうだからや・る・の！ ばれても子供の悪戯ですまされるでしょ」

彩穂はこういうのだが、十五歳ならば責任能力は問われそうな年齢である。

この辺りを都合よく子供だと断言したところに、彩穂のその性格がにじみ出ている。

それは、こうこうこうなって——あるいは捕まった場合とかの口裏合わせもしないことから、都合の悪いことに対してあれこれと勘案するという概念が欠落しているということ。

ただ、もし仮にそうなった場合でも、彩穂なら事前に用意していたリスクマネージメントよりかは、アドリブで乗り切ってしまうような少女であり、実際にそれをこなしてしまう少女でもあった。だからこそこのような発言を平気でして、最悪の場面を想定しておく心配がないのである。

「だいじょうぶに決まっているでしょー。警備はさー。ここ最近の南日本との情勢とかがなんやかんやで、前線基地のほうに人をとられて少ないみたいなのよ」

「だけどな——」

「いいー、わたしがなにも考えてないわけではないのよ!」

そう言いつつも、口角だけをきゅっとあげたような、そんないたずらっ子の笑みを浮かべていた。

この魅力的な笑顔に騙されてしまう。――だけど……。もうすでにこの街からいなくなった相原なら、きつとこういだろうだろうな。男子おのこたるもの女子おなこの手のひらで踊らされてなんぼのもんだと……。

ただこれをきっかけに、優介はある大事な事を思い出していた。それは、前にも夜間のミステリーサークル侵入を思案して試みようと考えていたことで、あれはサク兄が失踪する直前の出来事だった。

その時の彩穂は、ここまで嚴重な警備の謎についてを勘ぐっていた。なにか世間に発表できないような理由があるのではないだろうか。きつとトンデモな原因が隠されているかもしれない。なんであんなに多くの警備員が『サクラミステリー』の外で見張っているのかともよく言っていた。しかも夜間に限っておかしいと――。

そして彩穂はそれだけに留まらなかった。自分なりにさまざまな仮説を立て始めるのだ。

例えばその説の中には、麻薬密売といった裏物取引ルート of 最終地点説。または、軍人、政界、経済界のドンと呼ばれる有力者のみが集める地下賭博説。さらには、八年前（当時は六年前）から囁かれている宇宙人擁護説に、宇宙人捕獲観察説など。そんなのがあったりした。

だが、一番突飛で面白そうな案として挙げたのは、異世界空間交差説なんて名付けた理論であった。

それはまず、あの付近に明らかな波動の変化があるという前提をたてて、空間を乖離させるようなおかしななにか、が存在するという説。つまりは、この世界がどこか別の世界と繋がっていて、空間

の置き換えを促す波動が存在するという話だった。

けれども、それこそ現実には全くそぐわないような定義でやつと成り立つ理論であり、しかもほとんどはサク兄からの受け売りだったらしかった。

ただこのこととはまるで関係なしに、人は隠されたものに対して誰しもが思うことがある。やはり特別ななにかがあるのか。禁忌に値するなにかが……それとも他に理由が——なんて。

だったら人はそれを求めてしまうのは必然といえるのかもしれないし、今回の彩穂がこういう考えに至るのはしょうがないのかもしれない。

「で、今回はどんな説だ？」

「説もなにも、ただ面白そうだからよ！」

「根拠はないのか?!」

「ない……」

「だから本当はないのか？」

「なによ!」

「異世界の空間とかは？」

「なにそれ？ ファンタジーしすぎ……」

「ファンタジー？」

「だから、異世界の空間ってなによ」

「こっちが聞きたいんだけど……」

「こっちが聞いてんの！」

月明かりの下、二人の会話は成立していなかった。

はい、ここまで目を通してくださった方、貴重な時間を割いてくださり本当にありがとうございます。

このファンタジー的展開にSFっぽさをくどくどと付け加えてしまう作者をお許しください。って大丈夫ですよね……。あの1-2あたりに比べましたら。

そしてですね。次あたりで第一章の大きな転換点がやってきます。いや、まだ書き終えていないのでやってきてほしいです……。、というところでしょうか。

で話を変えますと、あらすじをだいぶ変えました。よりセカイ系な世界観がだせるようにと……。、だけどまたすぐに変えそうなんですけどね。

まあ言ってしまうえば、キーワードもだいぶ変わっていますから。初期にあったツンデレ（彩穂さんですよ）とか、魔法（優介君だったりも……）なんかも合わないなあーと思ひまして消しました。

そういえばツンデレというキャラクターは、女性の方にはあまり受け入れないってどこか聞きましたけどどうなんでしょうかねえー?! では、感想も引き続きお待ちしていますのでよろしくお願いします

၈

結局、その後の流れとしては彩穂の計画通りに進んでいた。だが優介は、もう少しスクラップ帳の記述を事細かに説明させていたし、これからやる旨の作戦は成功する可能性があるのかどうかを算段はさせていた。

それは、もちろん優介が臆病であるというわけではない。

なにせ膨大な広さを持つサクラミステリーで、いろいろと噂のある場所……。あの四、五メートルはあるそびえたつ壁を越えたとしてもそこはまだ目的地ではないし、中心部まで数百メートルはあつてその間で警備の人に気づかれでもしたら大変なことになってしまう。

だからこそ、これが綿密な計画であるかをしっかりと確認して、ようやく優介は覚悟を決めたのだった。危険は百も承知であることももちろん受け入れていたが。

そして、ここまで話し合ったところで彩穂がナツプザックを取り出した。

やはり、いろいろと下準備をしていたようで、まずはトランシーバを二つ。だけど、それは子供のおもちゃみたいで、スイッチ機能と二、三の音量変化機能のみを持ち合わせた大雑把な代物ではあった。それでも、彩穂は「作戦を遂行するには必需品なのよ」と言い、どのくらいの距離で使用可能かどうかを確かめた後、実践に採用することを決定したのだった。

「こちら作戦執行本部。任務の遂行開始までの残り時間を報告せよ、雄介少佐！ザッ」

「こちらっ——えっと、ザッ」

優介は打ち合わせの時にした自分のセリフを忘れているのに愕然とする。

「バーカっ！ 雰囲気が台無し」

きつと三十メートル先で口をとんがらしているだろう、と声色で判断する優介。

「思い出さない！」

「はっ、思い出しました彩穂大佐っ。任務の遂行にぬかりなく準備は致しました。ザッ」

軽く文句を言われてから、目の前の世界が広がった感じのように——これだ……。

そういえば昔からずっとこの調子だった。追い詰められればできる。そんな緊迫感がないと駄目な自分にはちょうどいいのかもしれないな。こんな状況が——。

「よしっ。それと、残り時間のほうこくっ」

「はいっ。現在、行動開始時刻予定の十時五十分まで一〇五秒の開きがあります。その間までなにかありましたらなんなりと——ザッ——」

ここで百五秒って言った日には、なんてデリカシーのない無線における数字のつ・か・い・か・たーと、罵声を浴びさせられるだろう。

こんなことを考えた優介は笑いがこみ上げてくる。

あー、またいろんな決めごとを作ってバカばかりやっているぜ……。

家が隣同士でよちよちと歩きはじめたときからいつも一緒に。小さいときはお母さんが帰ってこないって泣きつかれたこともあった。あのころはイニシアチブをにぎっていたらしいのだが。でも十二年前の話だから全然記憶にはないさ、これが……。

しかしもうそれ以降、優介にとっては彩穂の一挙一投足に振り回されることは当たり前であった。お隣さんは天真爛漫で無邪気な女の子でねえー、うちの息子は尻に敷かれてるんだな、と言うセリフによって二人の関係性が表わされ、しかも彩穂が、その頃から提案してくることは高い割合で無理難題だった。

例えば、今でも優介が忘れないエピソードの一つに、こんなものがある。

「あやほがねっ、ゆーすけのねっ、どこがいいとおもっているかぁー、みつつあげなさあ——い!」

「えっ、自分のいいところ？ みつつもー？」

まだミステリーサークルの騒ぎもなかった頃の話。古株の桜も咲き誇っていたサクラナイト、もちろんサクラミステリーという場所は存在もしていない。

「えっ、ボクのいいところ？」

「うん」

とはいえ、小学校に上がったばかりの優介には厳しすぎる難題だった。

「えー、あしがはやい」

「うん」

「おりょうり？」

「うん」

二つまでは難なく当てることができていたのだが、そこから先は何を言っても首を縦に振らない。自分で自分のことを無駄に褒めまくることになって大笑いされる優介であった。

「それならっ……わたしのいいところを三つ挙げなさいっ！！ザッ」

それだからか今でも、その時のことを思い出せようと常時こんなことを言ってくる。

「バカ。せっかくの冒険的な雰囲気か台無しだろーが。ザッ」

と、ぶつぶつと文句を言う優介。

「冒険的な雰囲気なんて……もうずいぶん乗り気じゃない！ ザッ
ー」

「ああ！」

一度決めてしまえば、乗り気になってしまうのも優介のいいところではあった。

「それよりも！ 言えるもんなら言ってみなさいよー ザッー」

「ああ、言えばいいんだろー ザッー」

優介は腕を組んで大げさに考え込むふりをする。けれども、彼女の良いところというか、際立って特徴のある性格ならすぐ思い浮かぶ。

「何でも物事を自分の思い通りに動かすことができる行動力だな。ザッー」

「あつたりまえでしょー」

「それと、あり得ない発想や既存の概念を打ち破るおかしな思考回路。ザッー」

「それ褒め言葉あー?!」

そろそろ行動開始時刻か、と考える優介。
すでにナップザックから取り出していたロージンバック。それを

大事そうに握りしめる。この粉は、バイオリンの弓などにもよく使われる滑り止め対策のグッズである。その後は、身をかがめて助走の体制を整え、もう一度心の中で作戦の確認をしていた。

大丈夫、あの塀をできるだけ素早く登りきることだ。そして、中間地点のくぼみに到達したら鉤付き縄を投げる。これを内側の塀に引っ掛けて、それで……だけどな彩穂。これではまるで忍者ではないか！ そのうち水遁の術とかをやれ、なんて言い出したりはしないだろうか。

「なあ、彩穂。最後の一ついいところを教えてあげようか？ ザッ
ー」

「分かっているわ、そんなの。それにもうそろそろ時間！ だから
宣言いくよー！ ザッー」

「あー？」

「はい、宣誓！ わたしこと小手川 彩穂と、青井 優介は、互いを信じあい、本日限りの忍びの精神に乗っ取り、頭脳と体力を駆使し、速やかなる任務の成功に祈りささげ——」

「なっ、なげえーぞ」

「う、うつるさい！ そして最後まで目的の遂行を諦めないことをここに宣言します！ ザッー」

「ああ。俺もだ！」

「よおーし。ならしうがないから聞くけどさ——最後の一つのいいところはなによ？ ザッー」

「——あれだよ……」

「——もっ、もしかして……相変わらず?」

「ああ、相変わらずだ……」

「天才的に?」

「天才的だ……」

「それで?」

「俺の扱い方がほんとに、呆れかえるぐらいに——ザー——」

「なーにってんのよー。い・ま・さ・ら。——いくよ——っ
!」

——ヴオオオーオ　ワォー　ワォ——　ン　ワォ——
——ンッ——

問いを誘導させておいて突き放した彩穂の掛け声とともに、サク
ラミステリー周辺にけたたましく響き渡ったのは全てを切り裂くよ
うな狼の咆哮だった。そしてそれを合図とした優介は、静から動へ
と瞬時に切り替え、すがすがしいぐらいの俊敏な動きと華麗なジャ

ンプでスタートを切っていたのだった。

1・7（後書き）

【後書きは下に書かせていただきます】

はい、ここまで読んだ下さった方貴重な時間を割いてくださってありがとうございます。

まずお詫びをしなければならぬのは、このあとがきのことです。結構いろんな事をざくばらんに述べていました。

けれども、話が終わった後すぐに目に入ってしまったため不快になられた方もいらっしゃるのではないかと思います。

今の今まで気がつかなかった不肖の作者です。

申し訳ございませんでした。

なので少し行間を空けて今までと同じようにやっていこうと思います。

そしてペースの方なんですが、とうとうカメ（執筆）がウサギ（更新）に追いつかれてしまいました。ですからこれからはゆったりとしたペースになると思います。週二ならばよいほうです。

では、引き続き感想のほうをお待ちしていますので、どうか一言お願いしますね。

これは『むかしむかし』、といつても一年前ぐらいの話。

国語の授業で『相原』という人物が、ある本をモチーフにして創作した物語の一部分を抜粋したものであること。それを最初に述べなくてはならない。

——オオカミ少年が罪深いことについての考察——

ある生徒が質問をしました。嘘をつくことはいけななことですかと。

すると先生は答えました。嘘をつくことは悪いことではありませんせん、と。

そして、先生はたたみかけるようにこう言いました。

なぜなら、社会は欺瞞に満ちているからですよ。

だからですね、私たち先生の立場から、もう少し嘘の使い方を教えなければいけません。

だって正義だけを教えていれば、やがて理想論ばかりを振りかざす折り合いのつかない人になってしまいます。

または騙されやすい人になってしまいます。

なによりも偽りの社会を信じ込んでしまいます。

それに正しい嘘を教えないと、ついてはいけない場面でしてしまいます。

後は、ホントにピンチの——肝心な時に使えなくなりますね。

なんていったって、ウソはとっておきの切り札なんですから――。

「そうなんですかー。じゃあ、もう一つだけ質問していいですか？」

「はい、どうぞー」

「あのー、先生はオオカミ少年の嘘についてどう思いますかー？」

「うーん、そうですねー。私は女の子だったら許しますねー」

――ヴオオオーオ　ワオーン　ワオ――ン　ワオ――
――ンッ――

十時五十分。少し離れた小麦畑の森も、やや斜面のあるサクラナイトの草原も、たった一本の咲かない桜の大樹も、そしてここ、サクラミステリーの外部や内部にも同じようにあの咆哮が響き渡った。彩穂が着ているＴシャツの胸の部分には、一般に認知できる言語ならばそれを音声化させる代物――つまりは、音を変換させるボイスレコーダのような機械が括りつけてあった。しかもそれに、小型の拡声器もプラスして使っていた。

だからこそ、あそこまで本物に似せた狼の音が再現できたのだっ

た。

「優介、こっちは任せなさい！　ザッ」

「ああ！」

よし、返事が返ってきた。さあ、ここからだ……。ここから本領を發揮しないと。なんてつつたつて、ここの桜がまだ咲いていた時期でさえ……。そう、小学生の時から優介のいいところとは、天才的に、呆れかえるほどに扱いやすいと自負してきたんだから。

「うん……」

彩穂の鼓動を乗せた小さな掛け声は狼の咆哮でかき消される。

その中でも思う。

人は考える足なんだ。だから、考える前に自らの行動でもって事を押し進め、気がかりなことがあったらどんな手を使ってでも行使して、そして真実をつかみ取るんだ。

彩穂は行動を取り始めていた。

狼の咆哮が鳴り響いて間もなく、サクラミステリーの入口からやや右側に離れて石段よりの方に所在地をずらした彩穂。そしてここからもう少し離れた場所で——入口からだと左側のサクラナイトの方——待機させていて、掛け声とともに侵入した優介。

今まで二人は死角になりつつも、サクラミステリーの入口から一番近くになる場所を調整して連絡を取り合っていた。

ただそうなると、見張りによる無線の傍受を懸念しなくてはいいけ

ないのだろう。だからこそ、わざわざちやっちい作りの玩具トランシーバーを使用していたという事実があった。

それと二人が事前に確認していたことは、ミステリーサークルを囲んでいる壁が上からの見取り図でいうとほぼ正方形の形をしていること。さらには、警備の見張りが入口がある正面と対角になるその裏側の二人しかいないこと、であった。

それは、まず正面の入口の駒を不可解なイレギュラーを発生させてひっpegし、あわよくば裏側の駒もその場で足止めさせる。もしくは悪くても遅らせることだった。

通常なら、裏側の駒がこの石段にやって来るための道のりは二通り。単純にサクラナイトの方の通路か、石段のある方の通路か。だから、優介と遭遇する可能性は五十パーセント。ただ、その場に待機することも考えるともう少し可能性は下がる。それにこの石段の方から問題が発生したと分かっていたれば、わざわざサクラナイトから遠回りするわけがない。パーセンテージは三十ないし、二十か。いや、サイコロを振って一を願う目の確率ぐらいには下がるのだろうか。

「おーい。そこで何をしているんだあー」

予定調和な男の声が聞こえた。

大きくて、野太くて、でも頼りにならそうな、存在感が足りないような声。

彩穂はもちろんの如く、入口にいた警備の男が自分の方に向かってきているのを感じていたし、もうすぐ声をかけてくるだろうことも少し前の時点で悟っていた。だから、そのときのための準備は既にできていたのだ。

気がかりといえば、脳内のアドレナリンがドーパミンの拡散作用によって異常なまでに気分を高揚させていることぐらいだった。

「……あ、ああのおー……、ごごごめんなさいっ!」

作戦開始。

そう思っ、ぺたんと石段に座った状態で頭を下げる彩穂。
エアリーな質感のミディウムヘアがぱさつと覆いかぶさるのも
気にしない。

「えっ？」

「オオカミ……」

「あっ、あれっってお穢ちゃんがやったの？」

「——は、はい……。あの、わ、わたし、怖かったから……。変な
人がきたからこれを鳴らしちゃったの。それで、どうしても、警備
の人にここまで来てもらいたかったの」

一瞬、男はいぶかしんだが、それもすぐに柔和な顔になった。

「そうかそうか……。大丈夫かい。それでこんな時間にどうしたの
さ？」

「——はい、ここの近くで大切な宝物を落としちゃって……」

「そうかそうか。大変だったね」

「は、はい」

ここはそう……。時間配分に気をつけないと。男が無線を手に取
り、裏側の相方と連絡を取り合う前に……。いやもしかしたら、も

う連絡している可能性だってある。それにあの音を聞いたなら自主行動を——あるいはマニュアルにのっとった対処をしているのかもしれない。よって、入口に新たな駒が置かれるのはまずい。

「もうびつくりしたさ。狼の遠吠えが聞こえてきて女の子がいる……」

「はっ、はい……」

「だから、耳とかシツポが生えているんじゃないかとねー」

男はおどけた様子でそう言った。

「はあー……」

「よかったよかった」

「はい……」

「耳とかシツポがなくて……」

「はい？」

「ん？」

「あー、あのー……、じゅー、獣耳萌えなんですか？」

あ——っ。なーにを聞いているんだあー！　いくら適度な時間配分だって、愉快的ショータムだって、や・り・す・ぎだよー。この自分の発言に笑いがこみ上げそうになる。そして、必死にシ

リアス展開と心の中で呟く。

「えっ、お、お嬢ちゃん。なんで分かつちゃうの？」

不思議そうな顔をして聞いてくる男。だが、その執着さ加減は誰であつても勘付いてしまつたろう。

そして彩穂も思う。

ビ、ビンゴなんて?!　なんか、なんかどん涙があふれてきそう。しかも必要なのは目薬じゃなくって動物の耳だったのね――。

「あつ、あの……おじさん。そ、それよりもわたし怖かったの。で、それでね、変な人があつちのほうに逃げて行つたの」

「なーに!　それを早くいわないと」

男は声を荒らげた。そして、いまにも援軍を増やして探すべきではないかと言いつつ始めたのだ。しかし、彩穂にとってそれはまずかつた。少なくともその援軍が来るまでは、この辺りで警備の人と待機しなくてはならない。それでは十一時十分という設定時刻に間に合わない!　ということは、真相が闇へと吸い込まれてしまう。

だから――。

ここはおおごとにしてはいけない。一人を引きつけて一人の動きを怠慢にさせるぐらいで丁度いいのだから。

「でもでも、もうだいじょーぶだから。ねっ」

あわててひらひらと手を振る。

最善のプランは計画通りにいかなかった。入口の男だけにでっち

あげた変な人を搜索させること。やはりそこまでは上手くはいかない。それならば――、と次なる展開を考える。

「やー、でも心配だからさ――」

男が無線を取った。するとそれを見た彩穂が、胸の近くで両手を組み目を瞑る。

その姿は敬虔なクリスチャンか、あるいは修道院のシスターかがお祈りを捧げているような格好だった。

だけどそれは、次なるプランを実行する覚悟を決めた瞬間でもあった。

1 - 8 (後書き)

【後書きを下に書かせていただいておりますが、ネタばれするかもしれませんが】

はい、ここまで読んでくださった方、貴重な時間を割いてくださって本当にありがとうございます。

まずわかりにくかったと思われるプロローグを、全て削除してしまいました。ここは試行錯誤ということでしょうかお許してください。

内容の方は、6話あたりからなんか書いていて恥ずかしくなるような演劇をしています。

まだ主要たる人物の登場は三人ですが、着々と内堀や外堀を埋めるがごとく、名前を出しているのでできそうな気配ですね。

それともう一つは、視点が頻繁に飛んだりしているのでわかりにくさの点で心配があります。どうなのでしょうか……。

では、作者の励みになりますので一言感想をお願いしますね。

——今まで明るかったよ、さようなら……懐中電灯さん——

彩穂の心のささやきと行動。

それはなんと——、無線をいじっている男が目を反らしている間に、近くに置いてあった懐中電灯をこつそりと蹴飛ばしていたことだった。すると懐中電灯は、石段を跳ねていきながらもカツカツと小気味よい音をたてて階下に落ちていく。

「お、お穢ちゃん！ どうしたのー？」と驚く男。

「かつ、かたみの、かつ、かいちゅーでんとーが……えっ……うっ……」

ぼろぼろと涙をこぼして、その場でしな垂れる彩穂。やつぱり目薬はいらなかつたみたい、と先ほどの獣耳やりとりを述懐する。

そしたら、その様子を見た男が素っ頓狂な声で、

「かつ、かたみ……？！」と慌てふためき、彩穂が

「——そうなの……」とふえーんなんて泣き叫びそんな顔を差し向けるのだ。

「……なら、今から取りに行つてあげるから」

「でも……、あんなに下まで……いつぱい時間がかかる。だから——」

ここで一度引いて不自然にならないように。警備の男にはこれ以上怪しまれないようにしなくちゃと、慎重に策を弄する。

「じゃあ、一緒に——」

あつ——、まずいつ！ 彩穂は慌てふためき咄嗟にこういった。

「あつ、あつ、あのーそのーあ……しが……」

「足？！ そうかそうか……」

「あー、しー……」

とりあえずは顔を伏せて足を投げ出す素振り。

すると、「あー、じゃあ俺が——」とか切り出し始め、やけに凛々しい顔を向けて言いかけたセリフを芝居がかった動作で止める。

きつとその後のセリフは決まっているのだろう。

あの仰々しいまでの仕草と誇らしげなその表情は、目の前の十五になったばかりの女の子に——そう、今まさに、後数センチばかりで気持ち完全に傾くこの瞬間に——いいように騙されてしまうことを微塵も考えていない表情だった。それは滑稽で見事なまでの間抜けさ加減を表わしているというのに。

「——今から取りに行つてあげるからな」

計算通り。

月夜に照らされた彩穂の瞳が妖しく光り、男の瞳もその光を別の意味に受け取って輝いた。

「す、すいません……」

心とは裏腹に、これでやっと駒を動かせたと思う彩穂。

「いいてことさ。こんなにも美人さんなお嬢ちゃんの涙を流させないこと。それがこの場でのおじさんの運命なんだから」

「あつ……」

「いい、男つてのは一生のうちに何人の女性の涙を止められるかが大事なんだよ」

語る男のその姿がいくらさまになっていても、これからの流れだとその言葉が詭弁そのものだ。

「……」

「だからこれを持って、待ってなさい」とさらに言っ、手に持っていた懐中電灯を手渡す。

「あの……?!」

「大丈夫。心配しなくてもすぐに帰ってくるよ。君のために――」

男はキザなセリフを連発して階下へと消えた。

しかし、ほんのひとかけらも心に響かなかった彩穂は、残酷にもこう思う。

女が強くなるには、自分の弱さで武装することなのに。それと、懐中電灯のスイッチを消しておけば、あの駒は完璧なる安全パイだったな――と。

さあ、急がないと――。

今の時間だとぎりぎり間に合うぐらいだろうか。あの警備の男に何も連絡が入っていないところから考えると、優介はきっと見つかってないはず。捕まっていなければ、もう入口にたどり着いているはずだから――。

思い出したようにサクラミステリーの入口に向かって駆けだす。くすりと笑いながら。

あの男の白々しい台詞が頭をかすめながら。

それでも、心の底から真剣に言われてみたいと願いながら。

やっぱり彩穂は、あまり颯爽とはいえない動きながらも懸命に走っていたのだった。

はい、ここまで目を通してくださった方ありがとうございます。今回は短くてすいません。

どうしても次のところを考えるとここで切らなくてはいけませんでした。

そしてとうとうジャンルをファンタジーに変更してしまいました。それと作品名を『蒼月の誓い、サークルの空』から『夜明けの月、サークルの空』へと試験的に変更します。実は某人気小説にあやからうとしています。また変更するかもしれませんのでご了承くださいませ。

サクラミステリーの入口にはすぐに着いた。

走りながらも、優介に無線を送ったところ、「おう、今走って向かっているから待ってる！」と力強い声が返ってきた。

うん。大丈夫だ、きつと。

そして彩穂は首にかけてあった鍵を外し、すぐに南京錠をガチャガチャと――。

これは相原からもらった鍵、本物をかたどって鑄造したスペアキー――。

「あれっ……」

なかなか上手くは開かない。緊張の所作なのか彩穂の右手は小刻みに震えている。

何度も何度もやってもなかなか合わない。やはり偽物のスペアキーだから？

早くしなければ、階下で懐中電灯を取りにいってくれた警備の男の人、あるいは裏側の人に見つかってしまう。

「開いたあー！」

ほっと一息ついた彩穂だったが、すかさず重い扉をこじ開けようとする。

が、それでも開かない！

そう、内側の鍵を開ける役目を果たす優介は、まだ着いてはいなかったのだ。

すると遠くの影から懐中電灯の光がちらついてきた。どうやら裏側にいた警備の男が、状況を確認するために回ってきたようである。それに気がついた彩穂は身をかがめ、極力音を立てないように心掛ける。

ここは……、ここは優介を信じるところ――。

「おう！　今走って向かっているから待ってろ！」と言ってくれたあの優介の力強い声を信じるしかない。きっと内側の鍵を開けてくれる。間に合う。だから間に合う！

でも……、とりあえずはあの男には絶対気づかれてはいけない。いや、まだ石段の方に向かう可能性だってある。

しかし、彩穂の願いは叶わず、裏側から来た警備の男は壁に沿って歩いてきた。

「……っ……」

やがてどんどん距離が近づいてくる。

その距離、今は百メートル。

草木のざわめきですら敵。風が吹いたら空気が変わってしまいそう。

五十メートル。

襲ってくる悪感のせいか冷や汗にまみれる彩穂。白色のライトも彼女の存在を映しだそうとさかんに輝きだす。

二十五メートル。

頭上ではフクロウが甲高い声をあげ、夜の闇を我がもの顔のように飛び回る。暗い大気を広げる翼――そこには空高々と飛ぶ鳥の優美さと力強さ。まるでそれは、人が地面に這いつくばっている現状を見下しているかのごとく。

そしてこんな時に彩穂は思う。

そう言えば昔は優介……よく大空を飛び回りたいって良く言って

いたっけ。今でもそう思っているのかな。自由に飛びまわればって……。あの鳥のように優雅に飛べれば、あの壁の——夜のサクラミステリーだってひっと飛びだし、サク兄が残したこのメッセージの意図もなんなく掴めたかもしれないのに……。

スクラップ帳の核心メッセージを思い返す彩穂。

——古の、夜長の月こそ夏の日の、一五一護で、かぐやを遣わし候

もう……、これではもう気づかれるのも時間の問題なの？

この作戦は間違いだった？ 失敗だったの？

もしかして先に優介を忍びさせとけばよかったの。

でも！

でもそれだと、優介の危険が増えるから止めたんだ。最低でも、自分が引きつけないといけなくて……。

もう一度、胸の内で扉が開いていることを願った彩穂は、最後の望みをかけてそれを引っ張ってみる。

しかし——扉はピクリとも動かなかった。

そうだよね……。

彩穂は落胆する。

だって、なんにも音が聞こえないもん。内側から栓抜きみたいなのを回すキュルって音とか、それを外そうとして錆びた鉄が擦れたギシーとかいう音が聞こえないんだから。

距離が縮まっていくな。その姿はもう肉眼で発見されてもおかしくはないくらいまでに。

もう少して、あと少してライトに照らさせる。どうすればいいの。

この際、南京錠の鍵を締め直して何事もなかったように振る舞う？

自分だけ……。

いや……、

そんなのありえない。

第一この場所にいる時点でもう言い訳にならない。

それとも懷中電灯の件で……やっぱりダメ……。

きつと優介なんてこの後遅れてきたとしても忠実に鍵を開けようとする。そしたら捕まってしまうんだ。それだけは避けなくては……。だったら――。

やっと結論を導き出した小手川 彩穂は決意した。

何を決意したかというと、一旦自分が犠牲になって優介には引き返してもらつことをだつた。

どうせここで見つかつてしまふぐらいなら、今すぐ無線で戻つてっていわないと――。

そして彩穂が無線のスイッチを入れて声を出そうとしたその瞬間だつた。

「おいっ……そこに女の子がいるのか？」と警備の男の声が聞こえてきた。それもはつきりとした声である。

思わず反射的に目をつむってしまった彩穂。縮こまった状態でありながら、さらに余分な力が入る。

しかし、そのあとに継ぐ言葉が聞こえない。

彩穂はおかしいなと思い、おそろおそろ目を開けた。すると、警備の男がこちらから背を向いていたのだ。

えっ、と驚くものの彩穂は様子を窺うしかできない。

(なんで……?)

「サ、サクラナイトに足を挫いた女の子……か。わかった。ザー」

すると今度は入口の方から、「あ、や、ほーっ」と囁くような声。
彩穂があれほどまでに待ち焦がれていた人物。

小さな、小さな声。

だけど大きな、大きな存在感だった。

そう、早くこっちにこいつて合図している人物……、
それはもちろん優介だった。

(あー、ま、間に合った……んだ……)

彩穂はほっとする。

安堵する。

脱力する。

まさに砂漠の中のオアシス、または鬱蒼とした森の抜け出した気分。

さまざまな感情が体中を駆け巡っては離さない。

そう、優介のいる方へと慎重に――。

ほんのわずかな隙間から顔を覗かせる優介のほうめがけて――。

あー大丈夫だった。
間に合った。

でも、優介を最後まで信じきれなかったのは悔いが残る、けど……成功したんだからそんな関係ないんだ……。

「ああ、今すぐにサクラナイトの方に向かう。ザッ」

男は無線を切って草原のサクラミステリー入口前を見渡した。

しかし、そこはいつもと同じ風景。何もない草原に風の音が聞こえる場所だ。

今はもう彩穂が、そして優介もいなくなったその場所を見やって、サクラナイトかぁーと呟きながらそっちの方へと向かう。

「あれっ？」

男が何かに気づく。

いや正確に言えば恣意的に仕組まれた事になるのだから、気づかされたってことになるであろう。この場合はおそらく。

「こっ、これは……、懐中電灯？」

そう、そこに落ちていたものは紛れもなく懐中電灯だったのだ。それもあの入り口の警備の男に貸してもらっていたもの。彩穂は入口に向かう直前に、少しだけ離れた位置にそれをほっぽり出してそっちに気を引かせようとしていた。これは南京錠の鍵が開きっぱな

しになっていることの早期発見を、少しでも遅らせようと目論みたことである。

「ん？ よ、よつばのクローバー？」

男ははてと首をかしげる。なんでよつばのクローバーが懐中電灯に添えられているのだろうか。もしかしたら相方のやつは、警備を怠って幸せの宝探しでもしているんじゃないだろうかと冗談半分で考えてしまった。

ただ、これも彩穂が気をそらせるために添えておいたことについて、もはや触れる必要すらないのかもしれない。

はい、貴重な時間を割いて読んでくださった方ありがとうございます。

前回、タイトルを変えますとお話して実際に変えたのですが、タイトルってホントに大事なんですねー。アクセス数が大幅に増えました。ありがとうございます。

これからもどうかこの遅々たる展開にお付き合いくださいますようお願いいたします。

十一時ジャスト。

再びおとずれた静寂な闇夜と、不思議な空間であるサクラミステリィ。

その中にて青井 優介と小手川 彩穂は、胸を張って、満面の笑みを浮かべて、それでも周囲を警戒しながら闊歩していた。また時間的な余裕も少しはあるのかゆっくりと慎重に歩を進める。

そして二人はこう願うのだ。

青井 優介は、どうせなら大空を飛んでみたいと――。

小手川 彩穂は、あの願いをこの空に羽ばたかせたいと――。

「もう、ホントに遅すぎるんだから――っ！ こんなスリルは味わいたくないのよ……」

とりあえずどうしていいか分からないから憚然とした表情で言い放ってやる、みたいな様子の彩穂。

入口付近から距離を取った二人の緊張の糸は、ほぐれにほぐれたようでだいぶゆとりのある行進をしていた。

「なんとか言つてよー」

「だってな、いや……」

さっきまで泣きそうな顔していたはずなのに、いや……涙がホロリと見えた気がしないでもない。だけど、こうやってすぐわーわーと罵詈雑言の嵐。

それに、こういうスリルを求めたんじゃあーないのか？

たがこんなことを心に押しとどめながらも、やはり作戦が成功したことに対して純粋な喜びを感じずにはいられない優介。自然と顔がほころび、よく見れば目の前の女の子もそう怒っているわけではない。

だからこそ、ここはおおらかな気持ちだと構え直すのだった。

「あつ、あたしに、なんか言うことはないの？」

すると、その思いに便乗したかのごとく彩穂がつっけんどんに言い放つ。

「あー……」

そして優介は、あの場面は後一步遅ければ駄目だった、ホントに紙一重、間一髪之差だった、と思い返し、「うん、遅くなってごめん」と、とりあえずは平謝りをする。

しかし、ではある。

実際にここに来るまでの優介は様々な苦勞したといってもいい。

まず思いのほかに壁の傾斜が強くてファーストコンタクトに手こずったこと、次に中間地点での足場固めがなかなか上手くいかなかったこと、極めつけは鉤付き縄を投げてもなかなか上手く引っかけからなかったことであつた。

付け加えておけば、常人の運動神経では絶対に無理であることも、

少々体力自慢であつても完璧に上手くいく可能性が皆無に近いことも、ここで言っておかなくてはならない。

「でもな、なかなか上手くこなせなかったんだぜ」

「——だと思つたのよ。遅すぎるし」

相変わらずそう言いつつも、苦虫をかみつぶしたような表情をしたいのにそれを隠しきれない、というような嬉しさが顔を覗かせていた。

「まあ、いいだろ？ どうやら運よく成功は……したし、後はあそこに行くだけだ」

「運じゃないの！ 偶然っぽい言い方なんて嫌い。成功することは必然だったんだから！」

「——まあ、それでもオツケーだな」

「あつたりまえでしょ——っ！」

「で、そっちはどうだったんだ？ 警備は……」

「む、そんなの完璧に決まっているじゃない！ ついでによつばのクローバをあげてきたんだから」

彩穂はしてやったりといった調子で話す。が、それを聞いた優介は腰に括りつけていた懐中電灯にひょいと手を伸ばし、スイッチを入れてから彩穂に差し向けた。

「おいっ、あれはいつだったかは忘れたけど、俺が二時間もかけて探したやつじゃないのか？」

「あー……」

上手い言い訳が見つからずに空気の漏れたような笑いをする彩穂に、優介はただ「はあー」とため息をつくばかりだった。

十一時五分、半径三百メートルの道のりを歩く二人はもうすぐ目的地である。

「なぐに言っているのよ！ 気の弱い男はいたとしても、気の弱い女の子なんてこの世の中にはいないのよ！」

どうやら軽妙な会話はまだ続いていったようだ。
それも彩穂が警備の男に対して、どういう方法を取ったかについてを聞いていたらしい。

「あー、てか、なんで狼にしたんだ？」

「えっ、それは……ま、まあ、警備の人が獣耳萌えだったらしいからとか……」

どこからか借りてきて、それを取って付けたような言い方をする彩穂。

「えっ？　なんで……、疑問系なんだよ？」

「——いやぁー……」

「いやっ？」

「そっちの嫌、じゃない」

「あー……」

「じゃあさ逆に聞くけど、どつしてそんなこと言っつのもっ」

「——」

「なにさ」

「まあ……、なんとなくなんだけどな」

「ふーん」

「うーん」

優介は首を傾げる。何か言いたそうにしているのだが上手く言葉が紡げない。

「なーに？　もしかしてホントはネコの方が良かったの？　気が弱い女の子風に……なーんて」

そう言いながら、招き猫のようなポーズをとってみる。

「……んなのどっちでもいいけどな」

ここでポツリと会話が途切れた。

それは優介が何を言い出すのかが気になっていたし、後もう少しで着くであろうサークル中心部の存在もおぼろげながら視界に入ってきたことでもあった。おのずと体中を駆け巡る緊張感にさいなまれてしまうのだ。

だが、静寂を縫うように入り込んできた次の話題は、
「相原の創作文章の話は覚えていたのか？」というすっ飛んだ内容だった。

「えっ？」

「あ、ほら、一年前ぐらいで国語の授業のやつ……」

「あああー。なんか才オカミの嘘がどうなったって話のやつ？」

ヒントを与えてもらってすんなりと答えることができた彩穂。
だが、「ああ、それもそうなんだけどもう一つの方さ」と優介は改めさせていた。

「え、あ……」

「ほら、あれだよ、大神、ホロ……、ホロなんだっけ？」

「あー、それ、優介、狼ホロケウに手を加えたやつでしょー」

「お、そんな感じかー？」

「ちょっと、この街の伝承ぐらい覚えておきなさいよー」

そう、この街の伝承とは、アイヌの言葉に纏^{まつ}わる狼ホロケウが大
神として崇められていることだった。ここでは初秋の季節、佐倉中
学の文化祭とほぼ同じ時期に行われる街の豊穰祭のメイン行事でも
あったのだ。だから、佐倉地区に居を構える人間であればしつかり
と覚えていなくてはいけない。

「あー……そうだよ。だからさ……あれはまずいんじゃないか？」

もちろん優介が言いたいのは、いまさらになつて狼の遠吠えをし
たことが大神を冒瀆したのではないかという意味であつた。

「いや、違うの……。狼の遠吠えにしたホントの理由は困つた時の
神頼みという解釈を利用したわけであつてけつしてそんな横暴なこ
と考えていたんじゃない——」

その言葉を聞くまえからくつくつと笑っていた優介。彩穂が必死
になつて弁解するもんだから冗談にしまおうと思つたらしい。
藪から棒にこんなことを言いだしたのだ。

「いやー……。満月に遠吠え、不思議な場所に、隣には女の子。俺
には狼男になる条件が見事に揃つて——」

しかし、その心使いも裏目に出たとすぐに勘づくのは蔑すむよう
な視線を感じたからだ。

「あのさ、自分から話し振つといてうやむやにしようとする優介に、
あたしはこのうえもなくあんたを警備の人につきだしたいんだけど
……」

そう言いつつ拳を握りしめる女の子がここに一人いた。

「あ、え、いや……じょう、だんだ、って」

「う……」

彩穂はぶいっとそっぽを向いたのだった。

「……」

やがて二人がそんなやりとりしているうちに、気づけばもうサークルの中心部の位置まで二、三十メートルの距離といったところまで迫っていたようだった。

まだ時間も、規定時刻から二、三分前といったところだ。
すると今度は、彩穂の方が脈絡もない話題を切り出し始めた。

「あ、あのさ……、今日って、何の日だか知ってる？」

なんだか急にトーンが下がったようである。

「えっ、今日？　ん……十五日だからあれか？　戦争の終戦記念日か……。今年でちょうど七十年目だったしな」

すると彩穂は冴えない表情で「それもそうなんだけど……」と言った。

そして意を決したような、両手こぶしを握りしめながらも肩に力が入る格好で、

「今日はね、かぐや姫が月に帰った日なのよ」と続けたのだ。

「……」

だがそれを聞いて優介が返答をしなかったのは、彩穂の突拍子もない発言に気を取られていたわけではない。

まさにその時であった。

小手川 彩穂という人物がそのことを言い終わったかどうかはまだ定かではないその時、サークルの中心部から人の叡智では到底作り出せないような光輝くフラッシュが、二人を襲おうとしていたせいで言葉を紡げなかったのだった。

1 - 1 1
(後書き)

はい、貴重な時間を割いて読んでくださった方ありがとうございます。

ですが……。

第一章がこんなに長くなってしまったとは当初から考えると予定外もいいところなんです。しかもこの感じが三、四話続きます。（あくまでも予定ですが）

なんかとんでもない長編になりそうな予感がしてまいりましたが、どうか気長にお付き合いをお願いしますね。

一瞬にして闇に光が降り注いだ。それは黒から白へのコントラスト。その場所の世界が変わっていく。幻想的な空間に変わっていく。その場所はまるで、神^{かん}さびるという表現が相応しいぐらいに光り輝く。

そしてそれが、なにか優しいオーブに包まれていくように明るくなっていき、現実世界とは違う異空間が現われた。大気中にはプラズマのような単円、二重円が浮遊していて、さまざまな形をした光の図形が燦然と輝く。まるで陽炎のように——とでもいうのだろうか。不自然に屈折しあつて遊んでいるのだ。光そのものが。さらには小さな乱気流みたいな——マイクロバーストなるものも風向、風速をかき回し、空中でもやのような煙を作り出す。

すると、やっと周囲の異常に気がついた優介であつたが、絶対的におかしな事があつた。

それは彩穂がいけないということ——。

しかし、彩穂の姿が見えないことに優介は気がつかないのだ。それだけでなく、彩穂と一緒にここへ来たことですら頭の片隅にも引っかけられない。

なぜなら優介は、自分がここにいるわけが分からなくなっていたからであつた。どのようにしてここにきてそれまでに何をしていたかも分からない。したがって彩穂の無理もないのかもしれない。

ただ、自分がここにいることは偶然ではなく必然であるような——そんな感覚に陥っていた。それもミステリーサークルにいうことが自らの強い意志に基づいてきたような感覚があつた。

「あれっ、俺はなんで——」

途中で言葉を詰まらせる優介。それは生まれてこの方、一度も聞いたことないような不思議な音色が聞こえてきたからである。

オルガンの音のようにも聞こえるけれど、なにか決定的に違いがある音。どこか悲しげな音だった。

正確には、悲しさというよりも儚さといった部分を強調している音なのかもしれない。メロディーを奏でているというよりも、単調なリズムでポン、ポン、ポンと紡ぎだされるようで、そこには旋律も感じられない。しかし、その音には心に訴えかけてくるようななにかがあるのに優介は気がつく。

「なんの、おとだろう……」

やがてメロディーは、唄を乗せてここまで運んできたようだった。

はーぎくら　ひらりひーらり　ふきあれる
ひいらーぎ　ひりりひりりと　ふとささる
ふ、ふくろー　ほろほろー　ふーらふら
ひいらーぎ　ひりりひりりと　ふとささる
はーぎくら　ひらりひーらり　ふきあれる

こんな歌が聞こえてきた。

ここで、あの時からずつとつぶせの姿勢で動けなかったのだが、やっとの思いで仰向けになる。もう長らく——といっても二、三分の間であつたが、あの鋭い閃光を浴びてから金縛りみたいな現象に

あっていたのである。

ふいに空気がわさわさとざわめく。夜風がそよいでいるとはわかにも言い難く、明らかに不自然な風が吹くのだ。そのうねりのような空間は優介の目の前で左、右、左、右とふらふら動く。

「だれか、いるのか？」

優介はそこに奇妙な気配を感じていたため、いつのまにか問いかけていたのだ。

「——！」

「……」

「だっ、だれかいるの？」

質問はトンボ返りで帰ってきた。

そこに誰もいないはずなのに。だけど唄が聞こえてきて、さらには問いかけが聞こえてくる。明らかに様子が変であった。

しかし、それでも優介は冷静だった。やはり虚視感みたいなものを感じていたからである。彼自身がなんだか遠い昔——あるいは、ことは違う世界でそんなことがあったような気がしていたのだ。深く説明はできないのだがそんな思いがしていた。

「——あっ、うん」

「——あの、わ、わたしが、視えるの？」

「——いいや、あっ、でも、だんだんと星が見えなくなってきた」

優介がこう述べたのは、なにも見えない状態から少しずつ——それは原子とか分子とかいったレベルの細かな粒子から、体の中心部分へときめ細やかに構成していくように——ぼんやりとその存在を表わしはじめていたからだった。つまり、目の前の少女の体を透かして見えていた星空が、少しずつ消えていく状態。

やがてはつきりと確認できるようになり、その少女の白いフレアスカートのようなものを身に纏った格好を映し出す。それはまるでフェアリーテールを思わせるようなたずまいで、体の四分の三以上はある長く美しい髪があつた。二本触覚のようにはねている髪の毛は意思を持っていくかのように頻繁に動き回っていた。そしてその少女の瞳の色は無垢で可憐なエメラルドだつた。

そんな姿をぼんやりと見つめる優介だつたが、少女がまた唄い始める。

空気に乗せて、いや想いを乗せて、

ふゝきのしたにて、コロポッポ、

泣いてた泣いてたコゝロポッポ、コロポッポ

しゝずくこぼれる、コロポッポ、

笑って笑ってコゝロポッポ、コロポッポ

コロポ、コロポ、コゝロポッポ

優介は思う。

なんだこの安心感は……。浅いまどろみの中、電車の音を聞きながらゆられている感覚だ。それとも、川のせせらぎや小鳥のさえずりなんかを、ただぼんやりと聞いているような——。牧歌的とでもいうのだろうか。

それに……。目の前に現れた少女はどう考えても不自然だ。だけど、そんなことすら吹き飛んでしまふしぐらいの幸福感。そして、

なんともいえない安堵感――。

なんだかすべてを包み込んでくれそうな雰囲気。エメラルドの瞳。しかしその瞳はマリンブルーに変わっていく。

「ねえ、なんで、あなたはおどろかないの？」

「なんで……、だろう？」

優介はそのまま寝ころんだ姿勢で彼女と向きあいながら、ふわふわと浮かんでいる少女に聞いてみる。

どうやら、少女の輪郭が整ってきていたようであった。優介の視界からは無数に瞬いていた星が少しずつ見えなくなっていく。

「あつ、その羽みたいので飛んでるの？」

そう聞かれた少女はくるりと身を翻そうとして自分の背中を見ようとした。しかしなかなか上手くはいかない。まるでイヌが自分のしっぽを探してくるくと回っているみたいな光景だ。

もちろん優介はその様子を見て驚いてしまう。

もしかして、自分の背中に羽が生えているのを、いまの今まで知らなかったのだろうか？

「――わたし、は、はね……羽が生えていたんだ」

手をひらひらとぱたつかせて、蝶のように舞いふんわりとしたしぐさを見せる。そんな少女から優介は目が離せない。その瞳に、そのしぐさに、ひきつけられるように吸い込まれていく。

「そうだよ」

「——そう、なんだ……」

「あのさ……、それを使えば自由に飛べるの？」

優介は思わず聞いていた。

それは自分が常々思っている気持ち、この閉塞感から抜け出して大空を飛び回りたいという心境からだろうか。気づけばそのような心情を吐露していたのだ。

「空を飛んでどこまでもいけるの？」

再度言葉を重ねる優介。

「——えっ?!」

少女の顔がたんだんと歪みつつ怪訝な表情になりつつあるのに、優介という少年は自分の大事な——あのライト兄弟にも似た、純粋なまでに空を飛んでみたいという小さかった頃の想いで熱に浮かれてしまっていた。だからそのことには気がつかない。

「羽のことだよ」

「——じ、これっ……」

「そう」

「——よくわからないの……」

「えっ？」

「……」

「なんで……」

少女は涙を流しながらも、「——じ……じゆうはないの」といつて空中で静止した。

その姿は生き場を失った彷徨える子羊みたいで、頬を伝う涙は“しくしく”と……。

ぽろぽろとかえんえん、わんわんではなく、しくしくと泣いていたのだった。

はい、ここまで目を通してくださった方本当にありがとうございます。

実はですね……もう一人のヒロインをどう演出しようかに苦心していましたのです。そこで幼馴染を飛ばしちゃいました。（笑）しかもまた謎を入れてしまいましたよー。

こんな作者ですが、どうかこれからもお付き合い願いますね。もう一つの作品『幼馴染との付き合い方』もよろしく願っています。

折しもその頃、小手川 彩穂はサークル中心部から遠く離れた場所にはじき出されていた。あの鋭い閃光を浴びてから、まるでなにかの結界が張られていて、その近くには踏み込ませないような感覚があったのだ。

たしかに中心部近くまで来たはずなのに、今はもうそことは程遠い場所。ここは鍵を開けて入ってから少し歩いてきた地点だろう。そこまで戻されている。彩穂は腑に落ちない表情であたりを見回し、うつぶせの状態ですっと息を吐いた。すると生暖かい風が、それを空気へと溶かし草とともに消えていく。

「どっ、どうしてー？ 優介は？ わたし……」

必死に考え込む彩穂。だがもちろん理由など分かるはずもなく、ただ呆然とその場に突っ伏したまま。時計を見て時間を確認しようとも思ったが、手を動かすのですら億劫だった。

あー。今度は自力で遠吠えでもしてやろうか、とやけっぱちで考えてみる。

「——エリアのC8——」

すると、突然の人の声がした。彩穂は耳をそば立てて声のした方へと意識を集中させる。

「——ロストエリアでの問題発生。懐疑論は——ザッ——」

基地の人？ それとも宇宙人なんてことは？ 彩穂は、昔よく第三種接近遭遇ごっこたるものをやっていたのを思い出す。

あれっ？ それもこんなに近く。目と鼻の先に人がいるとは。

この場所は夜間になると、軍のシュミレーション機密基地になるという噂。あれは本当なのだろうか。それともあるいは……。これは何か確証が得られるのかもしれない。あのストラップに記してあった法則について――。

彩穂は自分が立てていた予想の範疇をはるかに上回る出来事に歓喜していた。最悪の仮定を立てれば、ただ事では済まされないのかもしれない。だが、それでもこの緊張感のある展開にほくそ笑んでいたのである。

――こんなときだつてのに……。今は笑いが止まらない。でも、身動きがとれない……。

「――無事通過できたか……。陰謀？ とりあえず報告できる範囲でなし。ああ、了解。ダイタランシー液体注入――ザー」

確実に人の声だ。無線だろうか。軍機密に近い会話が聞こえる。

とりあえず見た目では宇宙人ではない？ まだ可能性は捨てきれないけど。無線の人と女の人、二人の男の人で計四人。無線の人はやはり指令的な役割を果たしている人？ 小声で話しているつもりか、両手で無線を抱え込んでいるんだけど……。でもそんなの関係なしにがなりあっている。もっ、もしかして緊急事態なの？ ひっきりなしに応答しあっているし、両手で抱え込んでいるのは焦りの表れ？

「――ヒニュートン流体は？」

さつきから盛んに無線で信号を送っている男。彼はさして特徴のない顔だった。賢さとか頑固さとかを示す格別な雰囲気があるわけではなく、ごくありきたりで平凡な顔。

でも、草影に隠れていた彩穂にとってはその男から大きな威圧感を感じとっていた。それは男の声が物凄く威厳に満ちていたからで

ある。

しかし、臆せずに少し自由が利くようになった体でじりじりと擦り寄っていく。寝ころんでいた体勢から匍匐前進の要領で進む。そう、彩穂は無線の男とその近くにいる人物の正体を懸命に明かそうとしていたのだった。

「――懸案事項だったやつ……そう、融解起動の基準値は……。なにつ！ 無事通過できたか。ザー」

「藤川さん。もう少し声を抑えてください。先ほど、狼を真似た子猫が侵入したかもしれないとの報告がありました」

「そうか？」

「はい。南京錠が開けられたとの報告のみありました」

「そうか……」

「ですから……」

「ならば心配ないだろう？ 秋月ちゃん。内側の鍵は開けられないだろ。それに、ここは通常と違う場所だ。やすやすと侵入できない。いままでだってそうだろ。いろんな意味でな――」

「はっ、はい」

「だったら、もっと派手にいこうじゃないか」

ただ、藤川と呼ばれた男がそう言う割には四人全員の服装は人目につみにくい闇装束であった。上下ともに黒いスーツのような格好、

黒い帽子、黒い靴。そのいでたちは異様にうつつてしまつ。

「心配することはなにもないんだよ」

藤川は不気味な声でぴしゃりと言ひ放つ。そして、また無線との応答へと意識を集中していく。

「——で、件の書類のチェックはできたか？　そうか。えつ、メイクライ戦法？」

乱射乱撃雨霰だが……いいのか？　エネルギーを充填するのには——そうか、問題はないのだな。ならばピースを導入——」
さらにもう一度、大きくて力強い声が闇にこだましていった。

1 - 13 (後書き)

はい、久しぶりの投稿です申し訳ありません。不肖な作者の都合で、もう一つの小説のほうにプライオリティーを置いている状態です。ものすごく緩やかな更新となりますがご了承くださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0673e/>

夜明けの月、サークルの空

2010年10月12日15時56分発行